

(表紙)

明治三庚午 正月より

御 触 留

塩 壺

用 所

壹ヶ月地代上り高  
一、銀貳貫百八拾匁四分

壹ヶ年  
銀貳拾六貫百六拾四匁八分

右の通取調候処、相違無御座候、以上

巳八月十四日

右 町 町年寄 珍

平印

沽券地代  
一、百坪に付

上

壹ヶ月  
銀百廿貳匁五分

一、百坪に付

中

壹ヶ月  
壹貫四百七拾匁

一、百坪に付

下

壹ヶ月  
銀壹貫三百貳拾匁  
壹ヶ年  
銀九拾七匁五分  
銀壹貫百七拾匁

右の通り御座候、以上

明治二年八月十二日〜二十六日

大 工

巳八月十二日

四谷塩町壺丁目 町年寄 珍

平印

人数  
九拾人

壹日分  
銀 拾三匁

此四割増  
銀 拾八匁貳分

飯料  
銀 六匁五分

外に支度料  
金 拾匁

御船にて被遣、御賄被下候積、着の上住居御割渡

人数  
四百人

壹日分  
男 銀八匁

女 銀六匁

外に夏・冬衣類、住居被下、御船にて被遣、御賄被下候積

蝦夷開拓に付、右人数被遣候積、方今米價を始、諸物価貴騰(高)の折柄、幕方難渋のもの、御手当被下候上は、相望候者可有之、急速取調、望のもの一區限り人数・名前書、来廿八日持参の事

但柔弱病身のもの相除、壮建の者相撰候事

右の通、常務方より御沙汰有之候に付、申合精々承り、実意に取糺、成丈け人数出候様論方いたし、有無の否明廿七日夕七つ時迄に、当所へ持参の事

巳八月廿六日

町 用 取扱所

明治二年八月二十六日、十一月二十七日

今般種痘の義、廉々御沙汰被為在候に付、忝区限り論方申合左の通

一、町々の内、種痘可致相当の先月下旬出生の小児人数、来廿九日

迄取調の上、両親の者へ難有御趣意能々申論、定て混雜不致様、

人数見計為差出可申事

区内限り出生有之候へは、其家主より不洩様、町年寄より為申

立、不取敢七十五日より百日の間種痘の義、急度願出候様論方致

し可申、若不進のもの有之候は、精々論方致候様可仕候事

右の段町々町年寄より軒別に為申聞、種痘日割、当日一区より町年

寄申合、忝人つ、最寄種痘所へ罷出、区内より罷出候もの名前承り

置、其区町年寄為相届可申事

右の通、常務方より御沙汰有之候間、一と際勉強いたし、御趣意相

貫候様いたし度、此段相達候、以上

己八月

世話懸 年寄共

右の通相達申候、以上

己八月廿六日

町用 扱 所

乍恐以書付御訴奉申上候

一、趙町拾三丁目町年寄新七奉申上候、今朝六時頃町内見廻りに罷

出候処、往還に年齢五拾五六才位に相見へ候非人躰の女、行倒相

果罷在候間、町年寄立合、死骸相改め候処、木綿剥々単物を着、

同古藍縞前かけを、罷在、側に古碗沓つ、竹杖沓本有之候、且身

の内疵所無之死骸に付、疑敷義も無御座候間、依之此段御訴奉申  
上候、以上

明治二年十一月廿七日 趙町拾三丁目 町年寄 新 七

町年寄 徳兵衛

東京 御府

一、市中町々諸商人名前并兼業有之者、幾口にても商ひ候丈の品、

名前上へ雛形の通御書出可被成候

一、問屋并仲買に加罷在候分、墨書にて業躰認候事

一、問屋銘立不申品は、朱書にて認候積り、尤問屋にても其問屋扱

に無之品小売致候分は、是又朱書にて両品廉洩不相成様取調候

事

一、書上振半紙片面、忝人に御認の事

一、忝区限合高御認の事

右は常務方にて、急速取調可差出旨、被仰渡候間、忝区限り半

紙・縦帳にて、来る十五日無問違御差出可被成候

一、問屋銘の義、表立候分、別紙廉書御達申候、此外の品は、問屋

と申立候ても、表立不申候間、朱書の方へ御加へ可被成候

右御達申候、以上

己十月五日 当番 世話掛

何問屋

\* 何小売 \*

何町家持 何屋 誰





明治二年十月七日

同炭薪問屋	表立組	畳表青筵問屋	水油仲買	髮油問屋
熊野炭大問屋	堀留組	畳表荒物問屋	下金屬金吹	本船町組
同 小問屋	新堀組	荒物問屋		同横店組
炭薪仲買	住吉組	荒物問屋		同小田原町組
味噌問屋		茶問屋 <small>老番式番</small>		安針町組
六組飛脚屋		板木屋		新肴場
紙煙草入問屋		藍玉問屋		芝金杉
下り酒問屋		大工道具打物問屋		本 芝
地廻り酒問屋		地漉紙仲買		四日市組
地廻り醬油問屋		干鰯問屋		小舟町組
溫鈍杜氏宿		石問屋		浜吉組
豆腐屋 <small>触次世話人</small>		釘鉄銅物問屋		
鑄物師		石工見世持		
飼鳥屋		廻船下り塩問屋	御堀浮芥	定湊受負人
廻船問屋		同仲買		屋形船持
番組人宿		地塩屋		紺 屋
辻番請負人		水鳥問屋		桶樽職人
漆仲買		岡鳥問屋	ノ百式銘	
材木仲買		下り糠仲買	今般調の口へ可入もの	
下り水油問屋		下り雪踏問屋	質屋	古着屋
同並仕入方	三拾四番組	魚油問屋	調に不及分	
地廻り水油問屋	廿八番組	魚油問屋	棒手振	日 雇
				縁日商人

時の物売

跡調の分

食物商人 諸職人

右の廉々取調、来る十二日迄に無間違可被申出事

已十月七日

扱 所

三田・麴町教育所入願の者、請書以来左の通認入差出し候様、昨日麴町教育所にて被 仰聞候間、此段御達申候、以上

已十一月四日

御用伺 当 番

教育所入請書の節

当人名前上へ相認候案

(原本のママ)

何府 何県 何領分敷  
何国何郡何村

組年 寄 庄 屋 敷  
頭 百 姓 敷

誰死か悴か二三男敷 幼名誰  
欠落致し候敷

誰 事 当 時 誰

已 何 才

何支配か誰領分敷  
何国何郡何村何誰娘

妻 な に

已

娘 な に

已

明治二年十月七日〜十一月十七日

何州敷 何国何の城主 何の誰元家来敷

何相勤候 誰死か悴か二三男敷 脱走致候敷

誰事当時 何の何某

已

何々の誰

妻 な に

同

娘 た れ

右の者何々の子細にて、何ヶ年脱走敷、欠落敷、暇相成候敷、夫より何の辺立廻り、何年何月中何処にて

官軍に抗候敷、何れへ附属誰へ陪

右の通被 仰出候間、此段御達申候、以上

明治二辰十一月四日

廿三番組

組々 中・添 年 寄 共

旧幕臣を始め、惣て町人に至る迄町地の内受領地、或は借地・預り地等の分、上地被 仰出候旨、去辰七月中申渡趣も有之処、今以心得違の者も有之に付、猶又申達候間、委細最前申渡の通、相心得可申事

已十一月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

十一月十七日

世話懸 当 番

明治二年十一月十七日、明治三年正月九日

組々 中・添 年寄 共

旧幕臣を始め、惣て町人に至迄町地の内受領地或は借地・預り地等の分、上地被仰出候旨、去辰七月中申渡候趣も有之処、今以心得違のものも有之に付猶又申達候間、委細最前申渡の通、相心得可申事

巳十一月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

巳十一月十七日

世話掛 当 番

正月三日於神祇官被為在

御親祭候後、翌四日より左の通日割を以、士民一同参拝被 仰出候

条、相達候事

四日

昼前 議員

同日

昼後直支配 神職

五日

東京府 兵隊

六日

同 士族

七日

同 卒族

八日

諸藩 士族・卒族

右に准し五拾区割

十九日

武拾四番組

一、参拝の義は、老若共駒下駄・足駄等不相用、慎拝参致候様可申付事

一、来る十九日神祇官へ参拝に罷出候年寄は、麻上下、町年寄は袴

羽織にて罷出候様申合候間、此段御達申候、以上

午正月

当番 世話掛

前書の通於神祇官に、被為在

御親祭候跡、御飾付府下人民へ拝参被 仰付、番組日割の通罷出候に付ては、幟其外一樣の手拭等、目立候品相用候向も相聞、以の外に付、右様の義無之様、区別限り年寄にて心付、不作法の義無之様、拝参のもの共へ、行届候様可申渡旨、常務方より御沙汰に付、此段御達申候、以上

午正月九日

世話掛

築地其外へ協

救社養豚場

救社養豚場取建、窮民救育の仕法相

試候義差許候間、有志のもの共協心同力致し、無産無職の窮民生産に有附、府内富殖の一端にも相成候様、町役人におゐても俱々尽力可致候

一、市中府内敗物たり共取集め、養豚飼料に致候義に付、町々裏店住居の者に至る迄、日々取捨敗物、又は米麦の洗水等取集置候へは、相当の価遣し為取集候間、右の趣町役人不洩様申論可置、尤取集め頃合其外委細の義は、協救社懸のものより談し可及候

十二月廿六日

東京府

右の通、常務方にて被 仰渡候間、此段御達申候、以上

巳十二月廿六日

当番世話掛

正月十四日

調所附 大井平馬

前書の通御達相成候処、今十四日協救社附大井平馬殿罷越、別紙被差置、年寄へ申聞、区内腐敗物取集方被談候て、市中町人共難義不相成様、書取を以申立呉候様被申聞、尤両三日相立候は、可罷越被申聞、立帰申候

別紙

養豚の策は、腐敗物を餌物とし、救荒予待を立るの良法にして、聊以我利を得るの策にあらず、金を持たるもの出金するは、手を濡すして三割の利益を得、貧なるものには任望、種豚相預け、出生する処の子豚相応の価にて買上遣、同利益を得させ、仕法の上にて出る益金は、窮民相救ふ為にして、詰り貧福平均

皇国一般富強を祈る処也、仍て御採用の上、協救社と称し、尽力する処有志を以、追々取開の一端、今日に至る、既に旧臘腐敗物の義に付、市中一般へ被仰渡の次第も有之、不日社中役人共相廻し、町々軒別に引合、相応の価を遣し、買集め方可取計筈の処、多く人民中未た其基本を不知して、苦情申唱候様にては、社中の者説諭方不行届に至り、官府にて御救・御憐愍の御主意に體し難相濟義に付、各方御集義の上、ケ様取計候へは、町々の弁利にも相成、苦情不申様腐敗物を以、自然と市中の為筋にも相成、於社中にも手数相省、無差支取集方出来可申との高案致承知度、前以御見込の処、及御相談候事

明治三年

六番町 法眼坂上 協救社

明治二年十二月二十六日、明治三年正月十四日

組々世話掛 中年寄共

先達て市中取締の義に付、相達候趣も有之候処、詮義の筋有之、更に左の通り相達候事

一、木戸并箱番屋取設に不及候、尤不取設候ては、取締不相立場所は、格別の義に付、取調其段可申立事

一、常夜燈の義は盜賊の為、又は通行人の為にも相成候に付、大通りは勿論、新路・横町・場末町々に至る迄、可成丈け取設可申事但場末又は所に寄、明地等多分有之、難取設場所は、其情実可申立事

一、通り表町并裏町に至る迄、家並順を以、何町第何軒と木札に相認め、入口へ掛置可申事

一、盜賊の義に付相達之、府下町村申合候通り、壹町限り家毎に拍子木又は竹螺の類用意致し置、身柄相応召仕有之ものは、夜分不寝番致し、盜賊有之候は、右鳴物を打叩き、近隣の者より最寄屯所へ及注進候義弥不可怠慢事

一、火の元并盜賊の為、店々のもの申合、自身番屋又は商屋等へ相詰め、夜廻り致候節、袖搦・六尺棒又は鉄鞭等携候義不苦候事但形容ケ間敷義無之、実備専らに致し可申、尤手余り候節は、時宜次第の所置不苦候事

右の外、先般相達置候通り、相心得可申事

明治三年正月十二日～十四日

右の趣得其意を、組々申合、取計可致もの也

午正月

右の通、常務方にて被 仰渡候間、此段御達申候、以上

午正月十二日

世話掛

旧幕旗下へ勝手賄金或は武器手当と称し、元知行所郷印・証文取之、借附候金銀取立候義、連々出願の者も有之候へ共、追て取調の上、及沙汰候迄、金主・借主共相對遂示談、相当の済方可致事

午正月

民部省

右の趣、市・在不洩様可触知もの也

正月十三日

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午正月十三日

御用伺 当 番

前書の廉々御達申候間、表裏店々不洩様御通達可被成候、以上

明治三年正月十四日

町年寄

府下開産の為、諸邸上地跡へ桑茶植付に付、買下け或は拝借等願出候もの共、夫々地所引渡候内、難渋等にて桑茶苗買入方事実差支、追々植付の氣候に至り、及遅々季節取失ひ候様にては不相成候間、右牀難渋の者共へは、桑苗・茶実当七月迄代金猶予致し、払下け可遣候条、早々物産局へ可願出事  
右の趣、不洩様可触もの也

午正月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午正月十五日

渡辺庄右衛門  
山崎民五郎

来る十七日本丸に於て、軍事御祭に付、明後十六日酉刻より入御迄 御神事に付、火の元の義別て入念候様可致候  
右の趣、市・在不洩様可触知もの也

午正月十四日

右の通、被 仰渡奉畏候、仍如件

午正月十四日

渡辺庄右衛門  
山崎民五郎

右御達申候、以上

正月十四日

当 番 世話懸

市中五拾区の内、旧幕府より受領罷在候町屋敷にて、當時上地に相成、買下・受負・拝借等に不被仰付場所、巨細取調、来る廿日迄半紙・竖帳へ認め、無相違可差出事

一、元地主名前

一、町所并坪数

一、家作の有無

一、沽券金何程

一、町会所拝借納残何程

一、当時焼失致居候訳

一、当時地所差配人名前

一、右地所に附候河岸地等有之訳

右の通、何れも絵図面相添、一定の認方に致し、忝ヶ所忝冊に仕立可差出事

右の通屋敷御改にて被 仰渡候間、左の雛形の通御調、忝町限り忝冊に仕立、来る廿日無相違御差出可被成候、此段御達申候、以上

正月十四日

当番世話掛

雛形

何町何番  
表間口  
一、裏  
行

旧幕臣か  
用達町人か

何の誰上地

差配人 誰

此坪

右地代忝ヶ年上り高

金何程

内金何程

町入用

差引

金何程

過か不足か

此地積沽券金何程

一、町会所金借用高何程当時納残何程有之訳

一、右地に有之家作の内、地借の分何坪、貸長屋の分何坪、此持主名前

明治三年正月十四日〜二月十七日

一、類焼場に候は、其訳可認め

一、地先川岸地有之候は、其間数・坪数可認め

右の通御座候、以上

午正月

何番組 何町 中年寄

添年寄



町々貧民共、活計相立不申ものは、早々救育所可相願処、中には其

店不残明店に相成候間、忝式軒店借の者残置、其もの必至と及窮

迫、救育所願出候ても、差配人并町年寄手心を以相延、其段店々番

人同様差置候族も有之由、入 御聴に、物産局より御沙汰有之、御

主意にも相振、以の外の義に付、已後右鉢の義無之様、区内限御心

附、急速救育所入相願候様、御取計可被成候、以上

午二月十七日

世話掛 当 番

一、御一新以来、府内政事精々取計候へ共、未た行届かざるの事勝

明治二月十六日二十日

に有之、畢竟我等重職の至らざる所と、深く煩念致し候、就ては市中・郡村の義は、大・中・添年寄共専ら毎区の事進退致候へは、其持場々々の安否は、是亦其責不<sup>たう</sup>逃<sup>のがる</sup>事<sup>のさうに</sup>に候条、今更改<sup>かへりかへ</sup>る

て申迄も無之候へ共、尚精々致協力御為可相成候事

一、市中は市中、郡村は郡村所役としては第一一和可致義肝要の事

一、上下無隔絶様可心懸、心付候義有之候節は、我等重職にも直に申出候義不苦候事

但銘々各々無之様諸事親<sup>いん</sup>切<sup>けん</sup>の計可為肝要事<sup>まのあたり</sup>

一、貧戸小民は別て心を添可申事

一、孝弟寄特の者、無落様引立可申事

一、愚癡・不肖の者は成丈け教戒可相加事

一、改て申迄も無之候へ共、方今海外並立の折柄に付、不得止政體御変革に相成候上は、於府内にも、以前の姿と相易<sup>かえり</sup>然に、人情動もすれは因習に泥み<sup>ぬみ</sup>、苦情等申唱候ものも有之哉に候所、役としては右辺深く體認し、不弁の者には、時々説得・教戒可致義、

肝要の事

一、毎年歳月を経候に随ひ、動もすれは怠り勝に相成、始りありと雖終なきは人情の常態に候へ共、役々としては、猶更心懸け互に切<sup>きつ</sup>磋<sup>さ</sup>をも相加<sup>あひま</sup>、憤<sup>ふり</sup>発<sup>はつ</sup>可致覚悟肝要の事<sup>みきり</sup>

一、昨年来紛擾<sup>げんじょう</sup>の折柄或は変令の次第も有之候へ共、右に疑惑致し、  
<sup>なやみ</sup>  
<sup>わづらひ</sup>  
<sup>したかう</sup>

憤発不致様にては不相濟候間、役々としては、無一念御為可相成覚悟肝要の事

午二月

右二月十六日知事公・大参事衆御立合、市政世話掛一同へ御説諭有之候御書付写

午二月十六日

達書

中・添年寄共

市・在往還に無宿・非人跡の者、行倒・相果罷在候節、是迄町年寄共より訴出来候へ共、以来中・添年寄共の内、奥印を以訴出候様可致候事

午二月廿日

中・添年寄共

府下の者異変有之節、検使願出候砌、中・添年寄の内、右場所へ不罷出者も有之、不取締に付、今後屹度検使場へ罷出候様可致候事

午二月廿日

右の通被 仰渡奉畏候、以上

午二月廿日

鳴田 藤一  
外売人



二月十八日以来取落、和田倉御門より龍の口・常磐橋・本町・小伝馬町・横町・若松町迄往還にて美濃紙六枚に綴、界紙に認め有之候書類拾ひ取候者有之哉

一、右書類

市中紙屑買立場へ相達、早々取調の事

右断獄方にて御渡に付、紙屑買其外不洩様取調、否来る廿七日無間違拙者共詰所へ御申聞可被成候

午二月廿二日

世話掛 当 番

陣笠鍛白羅紗

大属は萌黄山道彦筋

権大属は同山道二た筋

少属は黒老筋

権少属は黒二た筋

紋 金

筋 銀

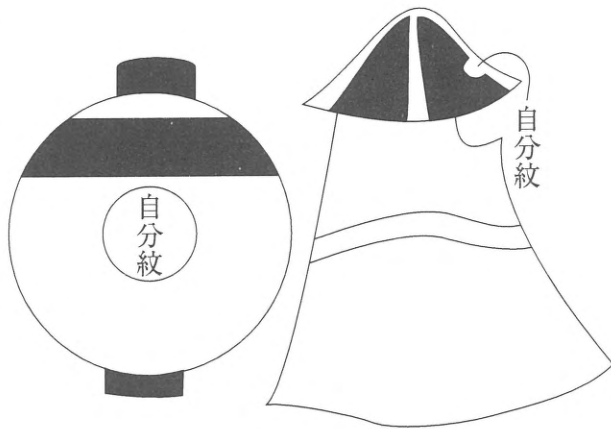
裏 朱

挑灯

紋より上

其半を赤くす

紋三ヶ所



明治三年二月二十二日〜二十五日

今般陣笠・提灯印御確定相成候に付、当府消防掛のもの陣笠・提灯共別紙雛形の通相改候間、火事場へ携候もの共へ、無洩様相心得可申事

二月廿三日

右御達申候、以上

午二月廿二日

右御達申候、以上

午二月廿三日

町年寄

申渡

一、銃炮・彈藥雷管売買方不取締に付、自今東京中へ鉄砲・彈藥売捌所々々所被取建候積に付、場所見立可申立事

但五ヶ所に出張可相定事

一、外国人より右品々買入候節、御用の外、自今以後売捌所より、当府へ願出、免許の上、神奈川県へ添管可相渡候事

一、当今市中に有之候銃炮・引藥明細取調、員数可申立候事

一、右品々売買致候仲間組合相立、都て売捌・買入共売捌所并出張所の外取扱申間敷候事

一、組合のもの共、日々売捌所并出張へ罷出、売買可致候、尤名・住所不知ものは勿論、総て無謂ものへは決て売渡申間敷候事

一、日々買入・売捌共明細帳面に認置可申事

一、売捌所取締并定詰等の者、申談、見立可申出、尤右手当向は、

明治三年二月二十五日～二十六日

売徳の何分可差出哉の義も可申出候事

一、売捌所・出張所の外密売買不相成候事

右の通、常務方にて、匠磋六郎殿被仰渡候間、此段御達申候、以上

午二月廿五日

一、市中旅籠屋へ止宿人の旅人、日々出入は勿論、国所・姓名等聡と相糺、端書を以旅人宿より、最寄兵隊屯所へ差出可申候事  
一、旅人宿の外、相對宿致候義、堅く禁止の事

但年来由緒有之不得止、止宿為致、又は諸商向取引の得意先にて、止宿為致候分共、前同様屯所へ相届可申事

右の趣、市・在不洩様可触知もの也

午二月廿五日

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午二月廿五日

水田 善三郎  
秋元 新一郎

施高

金百五拾貳両貳分

同

同百七両錢壹貫文

同

同八拾八両貳分

錢壹貫百廿四文

小石川水道町

家持 利兵衛

同(訪)

同所諏方町

町年寄 三郎兵衛

同所春日町

同 善 助

其方共義、去る三日小石川堺町続より出火の節、類焼致候居町其外小前のもの并貧民共等難渋を相察し、銘々施差出候段、奇特の義に

付、為褒美利兵衛・三郎兵衛へ白紬一疋つ、善助へ同壹反被下之

六人申合施高

金九拾六両也

元岩井町

町年寄 重兵衛

同町家持 幸七

同 平兵衛

同地面差配人 市右衛門

同重兵衛地借 龜五郎

同忠兵衛地借 政吉

其方共儀、近來諸色高直に付、小前のもの共難渋を相察し、銘々申合、居町窮民共へ施差出す段、奇特の義に付、為褒美と金三百足つ、被下之

右の趣、市中不洩様可触知もの也

午二月廿五日

右御達申候、以上

午二月廿六日

町年寄



往來のもの於道路に、雛形の通鑑札見当候は、拾い取、御郭内は諸御門、御郭外は東京府兵隊屯所へ差出可申事

三月

太政官

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触知もの也  
右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午三月廿五日

松嶋兵右衛門

萩原金藏

御達の覚

一、大工始・諸職人賃銀、以来左の通相定置可申事

但左の通不取用者は、早々可申立事

一、職人賃銀時々変更有之は自然の勢にて、此後改革等致候ては不相成節は、年寄にて篤と詮義の上、相当の賃銀取調可伺出事

一、毎区職人の内、人物相撰、行事を立置、時の取極の賃銀申渡、仲間合不相当の料、不受取様為致、其上にも不埒の所業有之ものは、年寄へ為相達、其品に寄、官へ可申立事

一、石工は嘉永度仲間十三組に取極め、行事も有之、屋根職の義は、古来式拾八講に銘義相立、仲間世話方有之、取締相立居候間、前々の通居置、尤右職の者、人数不足にて毎区行事相立候義は不及、在來の行事・世話方有之場所、其年寄より時々取極め賃銀等申渡候事

銀等申渡候事

午三月

常務局

明治三年三月二十五日

大工老人

手間銀 上 銀拾貳匁五分

中 同拾匁五分

下 同九匁

飯料 銀九匁

但早出 銀壹匁五分

居残 同壹匁五分

穴穿大工老人

手間 銀拾五匁

飯料 同七匁五分

但早出 銀三匁七分五厘

居残 同式匁五分

杣老人

賃 銀四匁五分

飯料 同九匁五分

但早出 銀貳匁

居残 同式匁

一日雇

銀拾五匁 手間代

家根職老人

同八匁 飯料代

銀廿八匁

同五匁 竹釘代

但早出の分 銀三匁七分五厘

残居の分 銀三匁七分五厘

明治三年三月二十五日

石工老人

手間賃銀并飯料・鑿焼料共

銀廿匁

但早出 銀拾匁五分

居残の分同三匁五分

左官老人

手間

銀拾匁五分

道具代

同匁匁五分

飯料代

同八匁

但早出

銀式匁

居残

同式匁

土こね老人に付

銀拾匁

但早出・居残共 銀式匁

手伝老人に付

銀九匁

但早出・居残共 銀式匁

木舞搔手間

手間

銀九匁

老人に付

飯料

銀八匁

瓦師上老人 葺手間一日雇

飯料共

銀拾八匁五分

但早出

銀式匁

居残

同式匁

同中老人

同断

銀拾六匁五分

但早出

銀式匁

居残

同式匁

同 手先老人

手間・飯料共

銀拾三匁五分

但早出

銀匁匁五分

居残

同匁匁五分

手伝老人

同断

銀拾匁

但早出

銀匁匁

居残

同匁匁

薦人足老人に付

賃銀・飯料共

銀拾匁

道具代

銀式匁

早出

銀式匁五分

道具代

同五分

居残り

同式匁五分

道具代

同五分

木挽賃銀

一、杉・檜 長壹丈三尺 尺メにて一と通  
巾壹尺 銀五匁壹分六厘

一、松・檜 右同断 銀五匁七分式厘

一、梅・栗・赤松 右同断 銀六匁八厘

一、塩地 右同断 銀五匁五分五厘

一、槻 右同断 銀七匁四分八厘

一、杉板尻 右同断 銀三分六厘

一、松・檼板尻 右同断 銀三分八厘

諸職人手間賃銀、別紙の通被 仰渡候間、忝人別受印取之、来月五日五区御取纏、御当番にて御持寄可被成候

但屋根職・石工の外は、区忝組にて一職兩人程行事相立、右行事名前、来る晦日迄には又五区御取集め、詰所へ御差出可被成候、尤合冊に致候間、表紙に不及、半紙・立帳、片面式人宛の積り、御認の事

三月廿五日

世話掛り 当 番

諸職人行事、人撰の上、来る晦日名前御書出の積、昨日御達申置候へ共、右の内土こね・左官手伝・木舞搔は左官職行事へ附属、穿穴大工は大工行事へ附属、瓦師手伝・同手先は瓦師行事へ附属為致候積、申上置候間、此分は行事人撰に不及候

明治三年三月二十五日～四月八日

一、杣木挽は、人少にて五拾区には相立申間敷候間、先御組々にて人数御調、御書出可被成候、尤右の内、重立候者何人、小前仕手方何人と内訳にて御書出し可被成候

右御達申候、以上

午三月廿七日

世話掛

旧幕府用達町人、役儀又は由緒を以、町屋敷受領、或は拝借・預り地等致居候者名前・町銘・坪数等不洩様巨細取調、来月二日迄に無相違可差出事

但半紙・豎帳に相認可申事

三月廿七日

右は屋敷御改森鎌太郎殿被 仰渡、呉々右日限有無共御申立被成へく候

老養扶持頂戴のもの、当三分御扶持方相渡候間、浅草平右衛門町札元鹿嶋屋清助方、勝手次第罷越、受取可申事

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午四月七日

萩原耕蔵

聯隊御引率

御出軍被為在候に付、御出軍の当日、合図烽火有之、依て今明日の内、音羽辺野中にて右烽火試験有之候間、為心得最寄町村へ不洩様

明治三年四月八日、十九日

可申通事

四月八日

明九日辰の刻、浜殿へ皇后行啓に付、火の元別て入念候様、市・在不洩様可触知者也

但雨天は御順延の事

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午四月

世話掛 中年 寄

大川橋東西 助成地

右助成地の義、東の方は中の郷竹町へ合併、西方は浅草花川戸町へ合併の義、願の通御聞済相成候間、此段御達申候、以上

午四月十五日

四拾三番組

今 井 二 郎

四拾四番組

中田五郎左衛門

永代橋東西 助成地

右東西成助地、東の方は深川永代町、西の方は新永代町と町銘相唱申度義、願の通被 仰付候に付、此段御達申候、以上

午四月十五日

七 番組

四拾八番組

貧民御救米錢渡等、毎月利米を以、世話方のもの取扱来候処、区に寄利米にては引足不申、世話方の者多分の立替米致難洪の趣相聞、是迄は五拾区取纏め、勘定書差出候処、已来は前月分翌月二日別紙の通、過不足共一区限り無相違差出候様、区内世話方のものへ可被仰付候、左候へは立替米錢共至急御下け相成候間、其段も御申付置可被成候、此段御達申候、以上

午四月十九日

町会所 年 番

以書付申上候

\*残米無之立替米錢案

午何月分\*

一、御利玄米

何拾石

何 番組

同 一、御救白米

何石何斗

御救何拾石

此玄米

何石何斗

差引メ玄米

何拾何石

不足御立替米

一、御救錢

何拾何貫文

御救何口御立替錢

此金

何拾兩何分

金壹兩に付

錢何百文

錢拾貫文替

右の通当何月分利米差引、不足御立替米錢共御下け渡被下置候様、御切符相添、此段奉願上候、以上

年号

月 日

何番組 米屋世話方

何町何丁目

何屋

誰

印

町 御会所

（符）  
\*毎月二日一区限り切府相添可差出事  
残米預り有之案\*

以書付申上候

午何月分

一、御利足米 何拾石

何 番組

同 一、御救白米 何石何斗

御救米何拾石

此玄米 何石何斗何升

差引、玄米 何拾何石

御預り利足

同 一、御救錢何拾何貫文

御救何拾口御立替錢

此金何拾何兩錢何貫文

但金壹兩に付拾貫文替

右の通何月分御利米差引残礎に奉預候、御立替錢の義は、御下け被  
下置候様、御切符相添此段奉願上候、以上

年号 月 日 何番組 米屋世話懸 何町

\*何屋\*  
借屋\*  
\*\*\*  
誰 印

町 御会所

府下諸問屋始諸商人・職人・遊民等に至迄、壹町内毎に別紙雛形の  
通り相認め、壹区合高致し、五区宛合高相添、来月十五日迄に可差  
出旨、編修局にて被 仰渡候間、此段御達申候、以上

午四月十九日

当 番 世 話 掛

調方左の廉

一、問屋其外共兼業の者は、重家業の方へ人数可書出

一、諸商人家業銘・人数の内、兼業の者何人と朱書可致

但幾口兼業にても同様可書出

一、諸職人・小商ひ等に至候ては、同居又は家族の内に有之分は、

内家族の者何人と朱書可致

一、壹町内、高・竈数の義、町内住居の者惣竈数可書出

一、通勤の者等は、家業同様可書出

左の雛形

何番組 何町何丁目

一、何問屋 何人

一、何仲買 何人

一、何商 何人

\*内何人兼業\*

一、何売 何人

一、何職 何人

\*内何人は家族の者\*

一、何稼 何人

一、 何人

一、女藝者 何人

\*内不残家族の者\*

一、通勤の者 何人

一、竈数 何人

一、人 何人

\*内兼業の者 何人

明治三年四月十九日〜二十日

明治三年四月二十日〜二十二日

家族の者 何人\*

右御達申候、早々表裏取調、員数書御差出可被成候、此段御達申候、以上

午四月廿日

町年寄

当節救育所入願中のものは相除、其余貧民の内、差向不願候共、此上救育所入可相願躰のもの、町年寄共にて勘弁致、中・添年寄篤と取調の上、別紙雛形の通、御書取有無共、一区限り来廿五日、無相違物産局へ差出候様、石井千尋様より御談に付、此段御達申候、以上

但右調方は当人へは、不申聞、町年寄見込にて人数申立候様可致旨被仰聞候

午四月廿二日

世話掛

雛形

何番組  
一、何拾人

内 何拾人

拾五才以上の者

何拾人

拾五才以下の者

右は此上御救育所入可相願見込の者、御尋に付申上候、以上

午四月

何番組 中・添 年寄 共

本文廿五日迄に間に合兼候は、廿六日休暇に付、石井様御宅へ差出候様、御沙汰の事

地図出来候は、早々可差出旨、常務局にて御沙汰御座候間、御手操次第御差出可被成候

但庇地有之場所は御書記可被成候

午四月廿二日

世話掛 当 番

一、川浚人足壮健老幼取交日々

人数四百人

此人数兼て書上有之貧民高に応し、左の通割付、日々差出候積

\*一、右人数目印木札の義は、当朝於場所に御渡相成、日毎に御引下

け被成下度

初ヶ條・式ヶ條目共

書面の通

\*一、日々人数操出し方の義は、区内限り弁利宜敷様申合候積  
一、日々罷出候町年寄弁当等御下け被成下候哉

書面評儀の上、可及沙汰事

一、出刻・引払刻限奉伺度

五つ時取懸の筈に候間、遠近に寄、都合可有之、引払の義は、

七つ半時と可相心得候

一、人数増減其外御模様相変候は、其日罷出候町年寄へ通達方御沙汰被成下度

書面の通り



一、晴雨の場合、迷ひ無之様御定被下度

四つ時迄晴候は、昼より取懸候事

右廉々奉伺候、以上

午四月

神田川筋 最 奇 年 番 共

川浚人足差出方割合左の通

\*川浚人足日々出高  
書上人数百拾人\*

廿三番組

\*同三百廿六人\*

廿四番組

\*同三百廿四人\*

廿五番組

\*同三百八拾六人\*

廿六番組

\*同三百五拾八人\*

廿七番組

\*同三百廿八人\*

廿八番組

\*同三百五拾九人\*

廿九番組

\*同九拾人\*

三十番組

\*同四拾人\*

三十一番組

\*同五人\*

三十二番組

\*同三百八拾人\*

三十三番組

\*同三百五拾人\*

三十四番組

\*同三百九拾人\*

三十五番組

\*同三百八拾人\*

三十六番組

\*同三百五拾人\*

三十七番組

\*同三百八拾人\*

三十八番組

\*同三百五拾人\*

三十九番組

\*同三百八拾人\*

四十番組

\*同三百五拾人\*

四十一番組

明治三年四月二十三日〜二十四日

一、手弁当持参の事

一、老若男女差別無之事

一、来廿八日初日の事

右の通可被相心得候事

一、浚場所の義は、船河原橋際水車脇より、水道橋迄の間に候事

一、町年寄出勤の義は、一区各人つ、可罷出事

右の通相達申候、以上

午四月廿四日

扱 所

人 相 書

\*張出し\*

耶蘇宗徒 五嶋無宿 作 蔵

一、年式拾四歳

一、中脊惣身肥満

一、顔丸き方

一、髪濃き方

一、眼大き方

一、鼻低き方

一、口小き方

一、言舌長崎辺の言葉にて訳り兼

一、唇厚き方

一、色白き方

明治三年四月二十三日、二十五日

一、着用品

一、木綿紺茶堅縞袴

浅黄絞三尺帯をメ

浅黄股引、紺脚半はき居

右の者津藩へ御預け相成居候処、同支配地安藝郡五百野村より去る

二日逃去り、行違不相知由に付、見掛け次第捕押可訴出、若隠し置

頭におゐては可為曲事

右の通市・在不洩様可触知もの也

四月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午四月廿三日

大坪捨五郎

松本市郎兵衛

右御達申候、以上

午四月廿四日

町年寄

兼て引渡置候開墾場、最早期節<sup>ツマ</sup>も相立、夫々桑茶植付方出来候筈に付、来廿八日参事巡見有之間、猶又精々植付方不都合無之様致し置、当日持場へ罷出、見分を請可申もの也

追て巡見の節、御布告<sup>背カ</sup>に省、植付不行届のものは、断然地所引揚

け候間、心得違無之様、可致もの也

但雨天は延引の事

前書の通被仰渡奉畏候、依之御請書差出申候、以上

明治三年四月廿五日

四谷塩町壹丁目 庄次郎地借

定 吉印

町年寄中

世話掛 中年寄

此程支那国上海に於て、同所両替店の支那人贖壹分銀五万五千鎊<sup>はぐ</sup>

相包居候者有之趣相聞候、右は追々諸開港場へ可持越哉に付、能々<sup>そこ</sup>

見改、不被相欺様可致旨、両替屋并貿易筋諸商人共へ不洩様、市・

在組々申通、早々可相達置者也

午四月廿四日

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

四月廿四日

馬込彦一郎

外式人

右御達申候、以上

四月廿四日

廿式番組 当 番

午正月分

四谷塩町壹丁目

一、銀百九拾六匁

兩年寄給料

一、同百廿五匁四分四厘

七分積金

\* 一、同廿貳匁五分

自身番屋地代 \*

一、錢三貫貳百文

欠付四人給分

一、金廿九匁八分

定番人給分

一、錢貳百文

定式茶代

一、同百六拾四文

市谷芥錢

一、同七拾貳文

小買物代

定式

銀三百七拾三匁七分四厘

錢三貫六百四拾文

皆銀三百九拾五匁五分九厘

臨時

一、銀百壹匁壹分四厘

く組入用

一、同八拾五匁四分六厘

扱所入用

一、同七拾八匁四分

同普請金、小間壹匁宛集

一、同三拾九匁

半紙・半切押切帳、紙代共

一、同廿七匁也

蠟燭代

一、銀三拾九匁九分

仮番屋疊刺ちん

一、同四拾九匁三分五厘

炭四表代

一、同四拾八匁九分貳厘

水油壹升五合代

一、同貳拾匁

去十二月分蠟燭代不足

一、同拾八匁六分五厘

提灯張替代

一、同貳百拾三匁三分

出火并当八度分

一、同百六拾四文

竹箒壹本代

此銀壹匁也

一、同貳百八文

草履壹足代

此銀壹匁貳分五厘

\*銀七百五十六匁九分壹厘\*

定・臨

銀壹貫百五十匁五厘

右を小間七拾八間四分に割

壹小間に付、銀拾四匁七分つ、

午二月分

一、銀三百九拾五匁九厘

定式入用

臨時

一、同六拾八匁貳分壹厘

く組入用割

一、同五拾九匁五分八厘

扱所入用割

一、同六拾貳匁七分貳厘

同所普請金割皆済

一、銀八匁貳分五厘

半紙拾狀代

一、同七拾九匁八分

(紀) き州蠟燭壹箱并地懸代共

一、同四拾五匁九分

炭四表代

一、同四拾五匁九分

水油壹升四合代

一、同七匁五分

筆墨代

一、銀三拾匁

須賀社・稻荷社定例祈禱料

一、同拾五匁

神田神社并其外御札料

一、同九匁八分八厘

自身番屋前下水直し代

明治三年正月〜二月

明治三年二月、三月

一、同九匁六分

提灯張替忒つ、鉄物直し共

一、同拾毫匁貳分五厘

大國傘忒本代

一、銀毫匁五分

手桶箍掛直し代

一、銀百六匁八分

出火弁当代七度分

一、同八匁也

同断の節、わらし代

一、同四拾八匁七分五厘

鉄棒直し代

一、同七匁五分

用使三度分賃銀

一、銀貳匁毫分

鐘木毫挺代

一、同拾毫匁貳分五厘

アメリカ力蠟燭毫袋代

\* 銀六百七十九匁貳分九厘 \*

定・臨

銀毫貫三拾四匁八分八厘

右を小間七拾八間四分に割

毫小間に付、銀拾三匁貳分

午三月分

一、銀三百九拾五匁五分九厘

定式入用

臨時

一、同三拾八匁六分八厘

く組入用

一、同四拾八匁六厘

扱所入用

一、同八匁

半紙拾帖代

一、銀四拾匁五分

紀州蠟燭毫箱并地懸共

一、同五拾八匁五分六厘

炭五俵代

一、同三拾四匁三厘

水油毫升毫合代

一、同貳匁五分

現在人別表紙綴ちん共

一、同五拾貳匁

戸籍みの紙七状代

一、同七匁五分

真かき筆代

一、同三匁六分

提灯張替忒つ代

一、同四拾貳匁貳分

鉄棒毫本・管輪継足共

一、同拾九匁八分

深川出火弁当毫度分

一、同三拾匁

二分分出火弁当、白米四升代不足

一、銀毫匁八分

手水盥籠かけ直し代

一、同貳拾匁八厘

新き薦口毫挺并直し代共

一、同三匁七分五厘

用使毫人

\* 銀四百四匁九厘 \*

定・臨

銀七百九拾九匁六分八厘

右を小間七拾八間四分に割

毫小間に付、銀拾匁貳分

三ヶ月

合銀貳貫九百八拾七匁〇六厘

右を三ヶ月平均毫ヶ月

毫小間に付、銀拾貳匁七分宛

頒曆授時の義は、至重の典に候処、近來種々の類曆世上に流布候趣  
無謂事に候、自今弘曆者の外、取扱候義一切嚴禁被  
仰出候事

午四月

太政官

右の趣、市・在不洩様可触知者也

五月十日

右御達申候、以上

五月十日

廿巻番組 当 番

拝借地・受領地・土地等の地先、河岸地地代、先達て書上候通り、  
來十七日出納局へ相納候様、谷様より御沙汰に付、此段御達申候、  
以上

但納候節、一旦常務局へ差上、書上帳へ御見留印を請候上にて、

出納方へ可申事

午五月十二日

世話掛

場末貧町の内、男子にて、拾七才より拾九歳迄の年齢、至て壮健の  
もの相撰、壹町限り人数書被成、区合人数御認め、明後十四日迄無  
相違可差出旨、常務局にて被 仰渡候間、此段御達申候、以上  
壮健のものの撰方は、筆算并力業其外何の業にても、一と廉宛遣<sup>つみ</sup>  
路有<sup>みち</sup>之もの御書出し可被成候、以上

明治三年四月〜五月十二日

午五月十二日

世話掛 当 番

組々 中・添年寄共

五拾区町々町年寄給料、当正月より四月迄四ヶ月分金三万四千貳百  
五拾八兩貳分銀三匁、外に去巳年金五千七百拾兩貳分立替相渡候  
分、貳分五厘利足を加、当午五月より、来る辰年迄拾ヶ年半、百貳拾  
ヶ月に元利割合惣聞小間七万貳百貳拾間四分に割、一区限取集め、  
毎月上納可致、此旨地主共へ可申通事

但元利割合方、別帳の通相心得可申、且又以後聞小間増減有之候  
は、右に応し割合可致、月々上納金高は、増減不相成候事

午五月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午五月十二日

村松 為 溪

外貳人

右の通、常務局にて被仰渡候間、此段御達し申候、以上

午五月十二日

世話掛 当 番

右御達申候、以上

午五月十二日

貳拾貳番組

右御達申候、以上

午五月十二日

地主代 徳兵衛

御銘々地主方へ御申通可被成候、呉々申上候、以上

明治三年五月十七日、十八日

何番組

\* 居付地主の分 \*

何町地主町人 何屋 何渡世 誰

何才

\* 居付後見の分 \*

何町内 何屋誰幼年に付 後見 何渡世 誰

何才

\* 居付又は区内に住居

何町同 何屋誰若年に付

後見の分

何町何町人 後見 何渡世 誰

但区外にて他町住居候後見の分は書出しに不及 \*

何才

\* 居付無之町内并区内に

何町何町人 何屋 何渡世 誰

地面所持のもの \*

何才

\* 他国住居のもの、其

同町地主町人 何屋誰何州住宅に付

外身分違のもの、所

沽券代 何渡世 誰

持地面沽券代のもの、其地面又は同町か区内に住

何才

居候もの可書上 \*

\* 店支配人か

同町同 何屋誰 何州住宅に付

店預り人か \*

店支配人 何渡世 誰

何才

一、何町

一、何町

一、何町

右何ヶ町は、前書廉々へ相当の者無之候

右の通取調申上候、以上

午五月

何番組 中・添 年 寄 共

一、壹町毎居付地主并町内地面有之借地住居致居候者、其外別紙難形朱の廉御調可被成候

一、上納地・受負地・拝借地の分、上納受負人・拝借人共前同様振合に御調可被成候

一、右取調候名前の内、通商司・通商会社等の勤致候もの并長病其外町用勤兼候者は、其段御記可被成候

右の通巷区限り御調書、五区宛世話掛へ御取集め、来廿日正五つ時、当所へ御持寄可被成候、以上

午五月十七日

当 番 世 話 掛

右御達申候、来る十九日迄に、無間違世話掛へ御差出可被成候、此段御達申候、以上

但至急の趣に付、同日迄に御差越無之候ては、御差支相成候趣に付、無間違御遣し可被成候、以上

午五月十七日

廿式番組 当 番

廿四番組

四谷塩町壹丁目地主町人

鷹野屋 小道具渡世 清兵衛

午拾七才

同町同

岩田屋 鞆調師 留次郎

同五拾毫才

同町同

山田屋 小切渡世 藤 七

同五拾三才

同町同

相木屋 粉名問屋 惣 吉

同三拾貳才

同町同

加賀屋 味噌問屋 五兵衛

同三拾三才

同町同

伊豆屋 大工職 五郎兵衛

同三拾八才

同町同

田中屋 春米屋 市右衛門

同四拾才

同町同

永田屋 大工職 珍 平

同五拾毫才

同町同

伊勢屋小左衛門 勢州住宅に付

店預り人 質・両替渡世 房三郎

同廿八才

同町借地町人

庄吉梓 岩次郎幼年に付

後見 塗師職 右 庄 吉

同四拾四才

右の通取調、此段申上候、以上

午五月十八日

地主代 徳兵衛

明後廿二日より第八字出勤、第三字退散の事

右の通相成候間、諸訴其外呼出物等、刻限無遅滞可罷出旨、市・在

可申通

午五月廿日

世話掛

右の通、常務局にて被 仰渡候間、行届候様御取計可被成候、以上

午五月廿日

世話掛

右御達申候、以上

午五月廿日

廿毫番組 御用伺 当 番

自今諸官省府県に於て、外国人傭入候節、総て外務省へ申立、免状を可請候に付ては、是迄傭入候向も、改て免状可相渡候条、其旨同

明治三年五月十八日～二十日

明治三年五月十九日、二十五日

省へ可申立事

但百姓・町人に至迄一時商法と傭入候義も、本文同様相心得候様、其向々より可相達候事

明治三庚午年五月十九日

太政官

右の通被

仰出候間、市・在不洩様可触知者也

午五月

外国輸出蚕印紙<sup>(卵)</sup>の義、二月廿日迄に製作員数凡積申立の上、輸出の

免許の鑑札可願請段、先般相達置候処、右申立遺漏の分も有之、

期<sup>(マ)</sup>節差掛り、夫が為に輸出不相成候ては、其もの共可為難洩候に付、当年の義は右期限に不拘、申立次第免許可致候事

午五月

民部省

右の通市・在不洩様可触知者也

五月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午五月廿二日

関岡平内

一、支那米 四千俵

一、切替米 貳千俵

右御払相成候間、市中望の者は、明廿三日東京府町会所へ罷出、見本米見分の上、即日入札可致旨、至急相達候様、御掛御役人中被

仰渡候間、此段御達申候、以上

明治三午年五月廿二日

町会所 年 番

右御達申候、以上

午五月廿二日

廿貳番組 御用伺 当 番

中・添 年 寄 共

公事出入にて罷出候者、明廿五日より、奥於白洲に取扱候間、初て訴訟に罷出候者は勿論、都て是迄の入口より奥白洲へ罷出可申事

五月廿四日

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午五月廿四日

島田 藤一

長沢次郎太郎

右の通、於聴訟方に被 仰渡候間、此段御達申候、以上

午五月廿四日

世話掛

是迄強盜等の分、当局へ差出し候処、以来盗一と通の義は、相届け候に不及、府下異変等の義は、是迄の通相届候様、組合限り早々通達有之度事

午五月廿五日

断獄掛

右の通断獄局より被 仰渡候間、御達申候

尤盜賊一と通りの義は、市中御取締り屯所へ、御届差出可被成候、且又府下異変・事変候義は、断獄局へ御差出可被成候、以上



午五月廿五日

世話掛 当 番

貧町にて、拾七歳より拾九歳迄の男子、先達て御調有之候処、右は力量有之職業覚度ものは、御遣路有之趣、常務方より御沙汰に付、御書上に不拘、今一応御調、当人名前・年付・職分御認め、来る晦日五区御取集め、詰所へ御差出可被成候

右御達申候、以上

午五月廿五日

当 番 世話掛

右御達申候、以上

午五月廿五日

廿式番組 御用伺 当 番

去巳六月聞小間高書上の内、増減有無毎区取調可差出旨、常務方被仰聞候間、別紙雛形に准し、二た通宛御認め、五区世話掛へ取集め、合高御添、来月十二日詰所へ御持寄可被成候、此段御達申候、以上

但去巳六月書上の節、全算違等有之分は、今般相改候小間高、御書出し可被成候、以上

午五月廿七日

当 番 世話掛

去巳六月書上  
一、入用聞小間何百何拾間何歩

何番組 何 町

但増減無御座候

外何ヶ町

又内  
聞小間何間何歩

何 町

明治三年五月二十五日〜二十七日

但何月御用地に相成、相減申候

何月何所へ替地願済、相減申候

聞小間何間何歩

何 町

但今般地代引下げ、小間相減候分

一、入用聞小間何百何拾間何歩

何 町

右相減候聞小間高差引并増減無之町々共、何ヶ町合

\*聞小間高何百何拾間何歩\*

外に  
式拾坪老間の割

一、小間何拾何間

新開町屋敷  
何々にて  
相増候分

何 町

札け下

老ヶ月地代上り高

銀何百何拾匁

但銀五拾匁を小間老間に立

入用聞小間

\*何間何歩

惣 合

聞小間高何百何拾間何歩\*

右の通、取調申上候、以上

庚午六月

何番組 中・添 印

右の通御達申候、以上

午五月廿七日

廿五番組 御用伺 当 番

明治三年五月二十七日（晦日）

下 札 け

本文地代は、去已六月取調候節の通り、  
平坪地代御調可被成候

近來時勢の変革より、俄に破産に及、困窮の者不少、畢竟遊惰<sup>マヤ</sup>の弊  
風に泥み、其身の勤勞を厭ひ、逸居末利を競ひ候、常情より如此に  
立至り候、就ては、銘々永久の産業に仕付候様、覚悟可致義は、不  
及申次第に候へ共、或は心付候共、其身の下手廻りより手を下し  
兼、日々押移り、益困窮に落入候者も可有之、依之今般授産仕法相  
立、趣町元紀州屋敷におゐて、工場取設候条、中・添年寄は勿論、  
其余重立候有志のもの共、得と體認致し、毎区衆義を遂<sup>マヤ</sup>げ、其風土  
の応否を熟察し、適宜の要品、或は新規工夫を懲<sup>マヤ</sup>し、後來物産共可  
相成品物等勘考致し、当府物産局へ可申出候、相糺候上、実効取調  
施行可致候条、何れも産業の基相立候様可、心掛候事、右の趣市・在  
不洩様可触知もの也

午五月

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、以上

午五月廿八日

片岡二左衛門

外老入

右の通、常務方にて、被仰渡候間、御達申候、以上

午五月廿八日

廿老番組

市中御救願御差出、即日小札御渡相成、翌日美倉橋元町会所へ米持  
召連、地主代罷出、米錢頂戴可致積、兼て御達申置候処、此頃に至  
り小札御渡日限より、日数兩三日も過、頂戴に罷出候区内も有之、  
右鉢因循致し候段、察斗致候へは、区内年寄より、昨今小札受取候  
杯申立、不都合の次第も有之、素より貧民相煩、飢にも可及程のも  
の、御救相願候義に付、右様延日致候ては、以の外の趣、御役人方  
より御沙汰御座候間、以來小札受取、翌日無相違頂戴に罷出候様、  
御取計可被成候、御救筋の義に付、同所渡方は休日無御座候間、此  
段御達申候、以上

午五月晦日

町会所 年 番

世話掛 中年 寄

府下戸籍書上の義、先般町年寄被廢候節、猶予願出聞届相成候へ  
共、一鉢戸籍の義は三月晦日迄に取調可差出の処、追々遷延、今日  
に至り候義にて、畢竟町用多端とは乍申、実は不行届無之とも難  
申、殊に町年寄共勤中過半調方出来致有之哉に相聞、此俟打過候て  
は、是迄の勤方無益に相成、且は追々入狂ひ後々迄混雜を引続候義  
に付、右戸籍調に限り、是迄の町年寄共にて取扱、早々取調の上、  
来月十五日限り本書差出候様可致

但戸籍の義、当四月の日付、町年寄役中の書上と可相心得候  
右の通各区并地方中・添年寄申合、厚胡<sup>マヤ</sup>町年寄共へ申通、一同勉勵

早々取調出来候様、尽力可有之候事

午五月晦日

右の通戸籍調所にて被仰渡候間、及御達申候、以上

五月晦日

世話掛 当 番

今般蒸気車道御造営に付、横浜野毛海岸即今埋立居候地面の端、石崎並より神奈川青木町海岸迄、長七百七拾間、幅三拾五間の土堤築造相成、右の内中央五間通り鉄道の御用地に相成、其外六間を道幅と致し、其左右残地埋立、御貸下け被下候様、尤右埋立方には、土砂運送の器械、及び横須賀表御備の泥揚器械等、望に任せ御貸下け相成候条、誰にても自今入費或は組合入費を以、右埋立方相願度ものは、野毛鉄道役所へ罷出、巨細の図面并仕様約定書等熟覧の上、不分明の廉は、猶篤と懸りの者へ承り合、来月二日迄に住所・名前等相記、願書可差出候もの也

庚午五月廿九日

東京府

右御達申候、以上

午五月廿九日

廿老番組 御用伺 当 番

右廉々御達申候、以上

明治三年五月晦日

地主代 徳兵衛

来る十四日氷川祭に付、十二日酉の刻より十五日朝に至、御神事に候事

明治三年五月晦日、六月五日

但重軽服者并僧尼の輩参朝可憚事

庚午六月

太政官

右の通、被 仰出候間、火の元別て入念候様、市・在不洩様可触知もの也

六月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午六月五日

山崎半兵衛

外老入

右消防掛被 仰付候事

権少属 武川清七郎

午六月五日

店火消申合有之町々の分、消防道具書出可申旨、消防御掛より御沙汰に付、此程書上の通御認、人数の脇へ消防道具御書加へ、明後七日迄に無間違御差出し可被成候、此段御達申候、以上

午六月五日

当 番 世話掛

寄渡世の内、踊・狂言・茶番等相催候者も有之候間、毎区御心付不都合無之様、御取計可被成候、此段御達申候、以上

午六月五日

世話掛

明治三年六月三日、五日

世話掛 中年 寄

近來所々におゐて、猥に高く相発し候花火相揚候趣、右は火災取締方も有之、以之外の事に候、以來風無之節、小供翫等より花火・鼠花火は格別、人家建込候場所は勿論、家近の場所にて、空へ上げ候竹花火等決して不相成候、尤花火渡世のものにおゐても、右鉢竹花火等売捌致間敷候事、右の趣心得違無之様、町・在井花火渡世のものへ、急度可触示もの也

午五月

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午六月五日

星野又右衛門

外式人

世話掛 中年 寄

男女入込の義、湯屋渡世は勿論、葉湯たり共不相成、且入口・格子・二階等暖簾、或は簀垂を掛置、往來より入湯人見通し不相成様可致、右は去已二月中申渡置候趣も有之処、追々不心得の者も有之哉に相聞、以の外の事に候、向後心得違無之様可致事  
右の趣市・在不洩様、早々可申通者也

庚午六月

星野又右衛門

外式人

右御達申候、以上

午六月五日

当番 世話掛

先般教育所取建鰥寡孤独の冗民は勿論、窮迫流寓の輩、各其籍を正し、無産の族無之様被過度、鴻大の従

御憐慮御扶助被下置候処、追々教諭に随ひ、御趣意奉戴、良民に立帰度心願より、夫々職業致勉<sup>べん</sup>、励候内、土方等稼のもの、左の賃銀を以差出候間、武家・市中共人足相雇分、高輪教育所へ可申出、人足共へは道具・弁当持参にて、取締の者付添、差出候事

一、銀貳匁五分 農業草取・土片付、芥溜・堀浚其外一日老人雇賃

銀

一、銀八分五厘 荒地開墾耆坪に付

一、銀廿八匁 道普請・土取場壺丁内外迄は土取片付、耆坪敷拼

の賃銀

右の通差出候事

右の趣、市・在不洩様、可触示者也

午六月

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

六月三日

当番 受印

右御達申候、以上

午六月三日

廿三番組 御用伺 当番

口達

新規春米屋相始候者は、区内在来の春米屋共へ遂示談を、名前書上可致、勝手に相始候事は不相成旨、一区内町々へ相達候事

午六月三日

右の通、常務局にて被 仰渡候間、御達申候

右去月三日御達申候処、右被 仰渡は拾九番組・貳拾番組・廿壹番組右三組に限り被 仰渡に御座候処、其節の御用伺当番心取違にて達致候義に付、外組々の義は、追て御規則被常立候上、從來の趣御心得、新古春米屋共家業差障申立、出訴等致候義無之様致度候、此段常務局へ伺の上、御達申候、急速行届候様、御取計可被成候、此段御達申候、以上

午六月七日

当 番 世 話 掛

出火有之類焼の窮民へ、御救握飯焚出し被下候に付ては、最寄分け町会所并美倉橋元町会所にて、為弁利京橋を境引分け、御賦相成候に付

一、京橋を境、南の方・西の方町々一円地方共出火の節、類焼町々年寄より時刻不移、町会所へ凡人数高可申出

一、京橋を境、東の方・北の方町々一円地方共同断、美倉橋元町会所へ同断可申出

右の通、御掛御役人中被仰聞候間、此段御達申候、以上

午六月

町会所 年 番

昨夜出火の節、町火消人足の内、怪我致候もの有之哉、至急取調、明十八日中申立候様、消防御掛より御沙汰に付、此段御達申候、以

明治三年六月三日、十九日

上

六月十七日

世 話 掛

右即刻御達申候、以上

六月十七日

廿壹番組 当 番

右御達申候、至急怪我人取調可差出候事

午六月十七日

扱 所

来十七日より竹橋・雉子橋・清水・田安・半蔵御門共御開相成候条、諸人通行被差免候事

但雉子橋を除の外、四御門の義は、暮六つ時限り禁止の事

庚午六月

太 政 官

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触知もの也

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

六月十七日

村 松 為 溪

右御達申候、以上

午六月十七日

廿壹番組 当 番

定例御救願の義、小札御用伺当番へ御渡相成、翌日右小札持参、美倉橋元町会所へ罷出、米銭頂戴、小札持帰年寄割印致し、是迄返上致来候処、以来御救小札御渡、翌日美倉橋へ罷出候節、年寄割印致し差出、米銭御引替に相成、小札御取上げ候に付、明日より前書の

明治三年六月十九日〜二十八日

通御取計可被成、此段御達申候、以上

午六月十九日

町会所 年 番

右御達申候、以上

六月十九日

廿貳番組

市・在組々 中・添年寄共

楠中将社御造宮に付、別紙の通被 仰出候間、市・在不洩様申通、

有志のもの可申立

午六月

一昨辰年春被 仰出候楠中将社御造宮の義、今般兵庫御委任に付、宮・百官・華族以下士族・卒・庶人に至迄、有志のもの金穀或は材木等番附の義、兼て御沙汰の通被差免候間、同県へ可相納候、員数書は当七月中、両京の内、神祇官へ可差出事

庚午六月十八日

大政官

英国龍動<sup>(インド)</sup>におゐて、来未年四月頃より毎年五月間博覧会有之、各国商人銘々製作物品のもの精巧を示、詔品等可引受為に有之候に付ては、府藩県商人共も親く詔物品可引受見込に有之、自力を以其品柄右会場へ差遣し度ものは、別紙規則書熟談の上、官轄藩県より来七月中外務省へ可願出事

庚午六月

太政官

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触示候、仍て博覧会規則書一

組一冊つ、渡遣、猶入用に候は、申立次第相渡可申候

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午六月十九日

関岡 平内

外老人

他国より送籍のもの有之は、別紙を以、伺出候様郡政迄可申通旨、

戸籍 御調所にて被 仰渡候間、此段御達し申候、以上

午六月廿日

御用伺 当 番

右御達申候、以上

午六月廿日

廿三番組 当 番

市中寄場の義、軍書講談・昔噺等に限リ、淨瑠璃人形取交又は男女入交、物真似等致候義不相成は勿論に付、以来写絵・手品・淨瑠璃等相催候ては不宜候間、都て去巳十月十五日御触の通、堅く相守候様区内年寄共厚可心付旨、常務局にて御沙汰御座候間、早々行届候様御取計可被成候、此段御達申候、以上

午六月廿三日

世話掛

右御達申候、以上

庚午六月廿三日

廿番組 御用伺 嶋 田

御郭内外御土居其外草刈の義、草刈冥加何程、拔草賃銀何程と両様に入札申付候に付、望のものは辰口土木司へ罷出、絵図面・注文帳

明治三年六月二十九日～七月六日

午六月廿九日

馬込彦一郎

外売人

五拾区町々町年寄給料、当正月より四月迄并去巳年御立替金月賦上

納方、左の通り

廿壹番組 但壹小間に付、銀三分貳厘貳毛

開小間三百九拾八間五分

銀百廿八匁三分壹厘七毛

此金貳兩貳朱ト

銀八分壹厘七毛

廿貳番組 但同 断

同九百八拾七間四分

銀三百拾七匁九分四厘貳毛八

此金五兩壹分ト

銀貳匁九分四厘貳毛余

廿三番組 但同 断

同貳千四拾三間三分

銀六百五拾八匁壹分三厘五毛八

此金拾兩三分三朱ト

銀壹匁八分八厘五毛八

廿四番組 但壹小間に付、銀三分貳厘貳毛

同千五百拾七間貳分

銀四百八拾八匁五分三厘八毛八

此金八兩貳朱ト

銀壹匁三厘八毛四

右の通五区取集め、小熊包に致し、差出し候間、来る九日朝迄廿五番組用所へ御遣可被成候、此段御達申候、以上

午七月三日

嶋田藤一

塩町壹丁目分

七拾八間四分 但壹小間に付、銀三分貳厘貳毛

銀廿五匁貳分四厘四毛六

此金壹分貳朱ト

銀貳匁七分四厘四毛六

此錢四百五十五文

東京・横浜致往復候アメリカ国川蒸氣、昨廿五日破裂致、彼是死傷凡百五拾人程の内、即死の者有之候処、宿所等も不相知も有之候間、心当のものは、即刻運上所へ可申出、且在方商人舩の者も有之、右は定宿等も可有之候間、其宿のもの引取として、同所へ罷出候様可致事

一、右の節、怪我人・即死人等所持の品は、凡拾ひ上置候間、品書を以運上所へ早々可訴出事

右の段至急各区へ相達可申事

午七月六日

運上所

一覽の上、来月三日迄に入札、即日開札の積に候間、右の趣市・在不洩様可申通事

庚午六月廿八日

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午六月廿八日

右御達申候、以上

午六月廿八日

廿貳番組 当 番

第一大区(ツマ)同

出張所南茅場町薬師別当所

白石 龍吉

岡本 三平

石川 為吉

第二大区同

出張所愛宕下平野旧邸

本多 権八

吉田 敬藏

岩本 二郎

第三大区総長

出張所旧幕臣初鹿野備後旧邸

西川 利三郎

西村 雄助

三井 一作

第四大区同

出張所牛込南蔵院別当所

渡貫 啓太郎

明治三年六月二十八日〜七月二日

第五大区同

出張所浅草南仲町一条院

水野 徳太郎

大津 藤藏

下條 清

黒岩 剛助

第六大区同

出張所本所大徳院

古谷 銚吉

大竹 節哉

右の通今日、中・添年寄被 呼出候処、書面の通被 仰渡候間、為心得と記置もの也

午七月二日

但第三大区出張所裏貳番町旧幕臣初鹿野備後旧邸

一、囚獄司徒場へ呼出の賈差紙を以、市・在へ罷越、支度代等貪取候者有之哉に相聞、不埒の至に候、素より右徒場より差遣し候差紙は、朱印相用候筈に付、朱印無之分は勿論、紛敷差紙持参候者有之候は、直に留置最寄取締屯所へ申立候様可致事

右の趣市・在不洩様可触示もの也

庚午六月

右の通被仰渡奉畏候、且御印章六拾枚御渡被下奉請取候、為後日御請書、仍如件



右の通、唯今御運上所にて被 仰渡、尤在方ものの分は、兼て横浜引合定宿・荷積宿等別て急速行届き候様可申通旨、御同所にて森新十郎殿御沙汰に付、御持場五区至急御通達可被成候、以上

午七月六日十一字出す

長澤次郎太郎

右御達申候、各様御区内不洩様御調、至急行届候様御取計可被成候、以上

午七月六日四字出す

嶋田藤一

去る五日鉄炮洲波止場におゐて、亜国川蒸気船破烈<sup>マツ</sup>に付、居組居候者数多怪我致候に付、一時救助致し、夫々送り遣し候処、尚又大学東校大学東校とは大病院の事同所におゐて療養相加へ候様、昨廿日運上所より相達置候義には候へ共、万一相洩候ては、炎暑の折柄自然手当方不行届、死に至り候様にては、実に愍然の至に付、早々同校にて治療候様中・添年寄共も其旨厚相心得、急度行届候様世話可致候、尤貧民にして入学致かたきものは、其旨可申出候

但本文に付、遠国の者も有之、何方へ立退候哉、生死も不相分候間、右の分も早々可申出

右の通市・在不洩様可触示もの也

午七月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午七月八日

小西喜左衛門

外老人

明治三年七月六日十一日

右は格別至急行届候様、常務方にて別段御沙汰に付、早々御取計可被成候、以上

七月八日

当番世話掛

右御達申候、以上

午七月八日

廿二番組 当番

当月五日築地海岸にて怪我致候者共、大学校東校入療治受方の義、御布告出候処、療治相願候もの人数少く、右は願出手重の様、心得違仕候ものは無之哉、校内療治方は勿論、御手当向行届、多分校入のものは助命可相成との事、御療治受候に付ては、一日病人の分、金毫分位、看病人差添候へは、此分銀八匁余、看病人は何人にてても右割合にて不苦、尤困窮人等は右入用差出兼候とも、施薬院被取建置候間、差支無之、病人手送<sup>運</sup>れ相成候ては不為に付、厚心付、成丈差急校入相願候様可致旨、常務局にて無急度御沙汰御座候間、病人有之御区内にて御聞糺、当時病勢輕重・医師名前・手当方模様、明十一日朝書取にて、呉々無間違拙者共詰所へ御差出可被成候

但病死<sup>マツ</sup>の、者は、名前并幾日相果候旨、御認め入可被成候

午七月十日

世話掛当番

右御達申候、以上

午七月十日

廿三番組 御用伺 当番

世話掛 中年寄

明治三年七月五日、十四日

此頃横浜居留英人シメツと申者、富興行相企、引札差出し、富札売捌候趣相聞候、右は去々辰年十二月中被 仰出候趣も有之、府下のもの共、右へ關係する義は勿論、富札買取候義、決して不相成候事右の趣市・在組々へ、早々不洩様可申通もの也

庚午七月十一日

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午七月十一日

片岡仁左衛門

外巷人

世話掛 年寄共

市中新春米屋追々増加致、古春米屋共及難渋は勿論、新古相互に渡世利潤薄に相聞、追て商律相定候節、変革も可有之候へ共、以来新規春米屋渡世勝手に不相成、若右渡世致度者は、其处在来の春米屋へ遂示談、名前書上可申、勿論

御一新後今日迄、既に新店相開居り候分は、其俣渡世致居不苦候事右の通区々不洩様、早々可申通事

庚午七月五日

右の通、常務局にて御沙汰御座候間、此段御達申候、以上

七月五日

当番 世話掛

右御達申候、以上

午七月六日

廿壱番組 当番

貨幣廣造は素より国家の大禁に候処、騷擾中の分は出格の筋を以、非常の寛典を以被 仰出候へ共、今日に至り候ては、却て恩に押し、禁を犯候者多々有之趣に有之、法憲を犯し、万民の疾苦を醸重罪に付、即今刑律被為 定候間、向後地方官におゐて管轄内厳密遂吟味、犯罪の者有之候は、右刑律を照準し即決処置の上、刑部省へ可届け出旨、被 仰出候事

庚午七月

太政官

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触知もの也

七月

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午七月五日

嶋田藤一

右の通、常務局にて被仰渡候間、此段御達申候、以上

午七月五日

当番 世話掛

右御達申候、以上

午七月六日

廿壱番組 当番

金壱両に付、錢拾貫文通用の義、兼て御布令相成有之候処、京撰の間追々錢貨潤沢に相成候より、自然錢下落の次に相成、拾貫文にては下方通用差間候趣に付、当分時相場を以、可致通用候事

但相場通用相成候へ共、錢払底杯申立、拾貫文内に引上候様の義、決して不相成候事

庚午七月

太政官

右の通被

仰出候間、市・在不洩様可触知もの也

七月十四日

東京府

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午七月十四日

兼房平十郎

任民部大輔

大木東京府大参事

大木民部大輔

当分東京府御用懸り被

仰付候事

庚午七月

右の通被 仰渡候に付、市・在不洩様可触知もの也

午七月十七日

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午七月十七日

小西喜右衛門

外吉人

公事人・引合人又は地主代等のもの、溜りへ入候節、甚不作法のもの多く以之の外之義に付、能々申諭し、孰れも相愼み罷在候様可為致旨、断獄御掛りにて御沙汰御座候間、御府へ罷出候ものへ、駈と御

申談御差出可被成候、此段御達申候、以上

午七月十九日

世話掛 当 番

明治三年七月十四日(二十日)

第三大区出仕被免

三井権少属

更に第六大区出張所へ可相勤事

第六大区出仕被免

古谷権少属

更に第三大区出張所へ可相勤候事

庚午七月十九日

東京府

別紙の通、昨十八日被申渡候間、則及達候也

午七月十九日

第三大区 出張所

中・添年寄中

訴訟人共代人差出候義に付ては、是迄度々御沙汰も被為在候処、此

程猶又無縁の代人等差出し候向有之、甚不都合に付、向後訴訟人実

病にて事実難罷出分は、全快迄相延可申、又難差延無余義代人差出

候分は、親族の内、或は戸籍に有之候召仕に限り、無謂無縁の代人

等為差出申間敷候

但相手引合の義も、同様可相心得候

右は今日聴訟御懸り方より、町々至急可申通旨、御沙汰に付、此段

御達申候、以上

庚午七月廿日

世話掛 中年 寄

右御達申候、以上

午七月廿日

廿番組 当 番

明治三年七月二十日～二十二日

御郭内外御普請・御修覆并屋根草取其外共惣て請負入札の義、度々及御懸合、追々罷出候へ共、人員少に付、尚市中望のもの至急御撰、町所名前・証人名前共被御申越置候様致度、左候は、前文入札有之候節、其人名へ申達し、入札可為致、此段及御掛合候也

庚午七月廿日

土木司

東京府 常務局 御中

前書の通御達申候、有無共明廿二日中可申出候事

午七月廿一日

廿番組 年 寄

\*張出し\*

廢帝<sup>(準七)</sup>

九条廢帝<sup>(仲慈)</sup>

大友帝<sup>(弘文)</sup>

右

三帝御<sup>(鑑)</sup>綏号被為奉候に付、明廿三日神祇官に被為行

御祭典候事

但今廿二日酉刻より明廿三日午刻に至御神事に候事

庚午七月廿二日

太政官

右の通被 仰出候間、火の元別て入念候様市・在不洩様可触知もの也

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午七月廿二日

兼房平十郎

町々店々并に附属のもの共、盜難は勿論、聊にても事变候義は、時刻不遷御届可申上旨、兼て嚴重御申付に相成届候<sup>\*居\*</sup>處、万々一御届延引相成候ては、不相濟候間、一同厚相心得候様、猶又嚴重御申聞の趣、委細奉畏候、速に一同へ申聞置、御届け延引不致様可仕候、依之御請書差上申候處、仍如件

明治三年七月

四谷塩町老丁目

差配人

清 吉<sup>印</sup>

惣 七<sup>印</sup>

兵 藏<sup>印</sup>

秀次郎<sup>印</sup>

庄三郎<sup>印</sup>

庄 吉<sup>印</sup>

忠兵衛<sup>印</sup>

藤 七<sup>印</sup>

鉄五郎<sup>印</sup>

安兵衛<sup>印</sup>

甚右衛門<sup>印</sup>

庄次郎<sup>印</sup>

五兵衛<sup>印</sup>

市右衛門<sup>印</sup>

喜兵衛<sup>印</sup>

月 番 地 主 中

市谷七軒町

同 嘉 七郎 印  
同 安右衛門 印  
同 清次郎 印  
市谷七軒町  
五郎兵衛 印  
市兵衛

去巳二月中嚴重御布告御座候以来、隠売女に紛敷所業為致間敷段、度々区内へ申渡置候処、右様所業致候者無之候共、限て難申哉に及承候間、猶改て去月中厚く相達、店々より請印取置候迄にも相達候処、矢張其以来此沙汰不相止、万一右様の及所業、御召捕に相成候ては斯迄申渡置候無詮、一同奉恐入候義に付、再々改て差配人は勿論、店々一統へ厚く可被申聞置、此上聊にても疑敷風聞有之候は、不捨置可被申出、時宜に寄以後為懲め御筋へ申上、嚴重の御所置相成候様可取計間、其場に臨み、如何程後悔およひ候共、無詮能々一統へ行渡候様可致旨、御申渡の条奉畏候、依之御請印形仕候処、仍如件

明治三年七月廿三日

四谷塩町壹丁目

地所差配人 清 吉 印  
同 惣 七 印  
同 兵 藏 印

明廿四日より第九字出勤、第四字退散の事  
右の通相成候間、諸訴其外呼出物等無遲滞可罷出旨、市・在へ可申  
通

同 秀次郎 印  
同 庄三郎 印  
同 庄 吉 印  
同 忠兵衛 印  
同 藤 七 印  
同 鉄五郎 印  
同 甚右衛門 印  
同 安兵衛 印  
同 庄次郎 印  
同 五兵衛 印  
同 五郎兵衛 印  
同 金兵衛 印  
同 市右衛門 印  
同 喜兵衛 印  
同 嘉 七 印  
同 珍 平 印  
同 安右衛門 印  
同 清次郎 印

明治三年七月二十三日

明治三年七月二十三日～二十九日

庚午七月廿三日

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午七月廿三日

御用伺 廿壹番組 当 番

別紙の通今廿三日被申渡候条、此段相違候也

午七月廿三日

第三大区 出張所

第三大区出張所へ可相勤候事

田 畑 半 蔵

庚午七月

東京府

元町年寄給料返納の義、当六月分より五拾区聞小間  
七万百八拾九間五分に割

壹小間に付 銀三分〇七毛

右小間掛り高を以、一区限り御取集め、毎月十日四つ時迄に無相違  
御持寄可被成候、且亦当六月分より返納中、小間増減無之上は、毎  
月御達不申候間、月々御取集め、御持寄可被成候、此段御達申候、  
以上

午七月廿五日

世話掛 当 番

町年寄地主役として可相勤の処、品々差支も有之、町年寄並被 仰  
付度段相同候処、御沙汰の趣も有之候間、別紙の通惣地主より書付  
取之、猶申上方可有之と奉存候、地主連印御取揃、来月二日五区御

取纏め、御持寄可被成候、以上

午七月廿五日

世話掛り

町年寄の義、為地主役と無給三ヶ年を限、順勤可致旨被仰渡の趣奉  
畏候、然る処老幼病者を除候へは、人少にも相成、且町内居付住居  
に無之者も有之、殊に不馴にて一区内の勤向心配仕候間、是迄相勤  
候町年寄等の内、実直用弁の者へ町年寄並被 仰付候様奉願度、左  
候へは、御府并に諸向御役所等へ罷出候義、私共手廻り兼候節は、  
同様為相勤度奉存候、右は町用差支に寄、右様相願候間、町年寄並  
相勤候もの給料の義は、惣地主共申合多少共小間割出銀致し、私共  
義は勿論、無給順勤可仕候、此段御聞済の程一同奉願上候、以上

庚午七月

何町地主 惣連 印

右御達申候、地主連印書面、来月二日朝詰所迄無相違御差出可被成  
候、以上

午七月廿六日

嶋 田

諸職人賃銀受取方、其外取締向の義、御沙汰被為 在候に付、  
私共一職毎に世話方名前申上置、仕手方賃銀の義、時々高下致砌  
は、私共談判の上、不相当無之様取極め、各方へ申立、御伺済の  
上、惣鉢へ為申聞、不同無之様為仕、万一過当の賃銀受取候者有  
之候は、厳敷申談、不取用ものは、名前各方へ申立候様可仕候  
一、五拾区分けの職分は、一区限り毎区世話方より、壹人別に木札

老杖つ、相渡置、外区へ転住致候ものは、元区内世話方へ取上げ、当越先区内世話方より、新規木札相渡候様仕、尤右木札相渡候節、為札料と老杖に付、銀式匁つ、受取、其余過当の料銀等受取申間敷、且又五拾区分けに無之、一と職限り在来の組分け・講分けにて世話方相立候分は、銘々組内職人共員数取調、木札相渡、時々人数増減相改め、職止め候ものは木札取上げ、新規相始め候ものは木札相渡候様可仕候、札料の義は、前同様受取可申候、在方より出稼の職人は、其落付候場所にて生国を相糺し、巨細世話方手元控帳へ相記し、出稼の趣断書致し、木札相渡置、帰郷の節は、札取上げ可申候

一、穴掘大工は大工世話方へ附属、土漫<sup>(邊)</sup>左官手伝<sup>(マ)</sup>は木舞搔は左官世話方へ附属、瓦師手伝・同手先は瓦師世話方へ附属致し、右世話方より木札相渡、賃銀其外高下其外共取締方可仕候

一、木挽は材木仲買行事、杣職は大工世話方へ談判の上、賃銀高下取極め可申候

右の通相心得、銘々組内職人共、心得違無之様篤と為申聞、木札の義は、出来次第御届け申上候上にて、渡方可仕旨被 仰渡の趣被仰聞奉畏候、仍如件

庚午七月廿九日 廿四番組

大工世話方

四谷塩町老丁目 家持 五郎兵衛

同

四谷伊賀町 甚五郎地借 芳五郎  
山田講

家根職世話方

同所塩町老丁目 秀次郎地借 喜三郎

同

同所伊賀町 半次郎地借 小右衛門

同

左官世話方

四谷伝馬町老丁目 地所差配人 勝五郎

同

石工見世持

同所同町式丁目 忠助地借 九兵衛

同

瓦師世話方

四谷伊賀町 地面差配人 万右衛門

同

同所忍町 万五郎店 庄三郎

右の通、今日世話方の者より請書差出候間、御支配限り猶又職人共へ御申付、行違無之様御取計可被成候、此段御達申候、以上

午七月廿九日

当番世話掛

右御達申候、以上

午七月廿九日

廿四番組 御用伺 当番

明治三年七月二十九日

明治三年七月二十九日

\*木札雛形

棟梁の分\*

何番組

何職  
棟梁

\*木札寸法

縦三寸貳分

横二寸三分\*

○  
焼印

何町  
誰地借  
誰

\*何\*  
仕手方の分

\*何町誰店  
誰弟子

弟子札表

誰\*

何番組

何  
職

悴木札

\*何町誰店  
誰悴

誰\*

○  
焼印

何町  
誰店  
誰

\*在方より

出稼の分\*

○  
何  
何番組

出稼  
職

右相達申候、以上

午七月廿九日

大工職

大工職

四谷塩町老丁目

家持

同人悴

同甥

同弟子

同

藤七地借

忠兵衛地借

同店

同

同

同人悴

嘉七店

同地借

喜兵衛地借

珍平

秀次郎

八五郎

林之助

徳兵衛

喜兵衛

銀次郎

松五郎

常吉

久五郎

金之助

鎌吉

喜太郎

利根次郎

何町誰店

誰方同居  
誰

○  
焼印

扱所



大工職

市右衛門店 丑五郎

家持 五郎兵衛

同人弟子 鉄五郎

大工職

弥兵衛店 政吉

同人粹 竹次郎

市兵衛店 作次郎

同 新次郎

五郎兵衛店 米吉

四谷塩町壱丁目

家根職

秀次郎店 喜三郎

同人粹 六之助

同店 儀左衛門

同人粹 常次郎

庄三郎店 豊吉

家根職

嘉七店 為吉

鉄五郎店  
市五郎方同居 金次郎

左官職

同町

嘉七地借 伊三郎

同人粹 喜太郎

青山東京府権大参事

北嶋東京府権大参事

鮫嶋東京府権大参事

任 東京府大参事

右

宣下に候事

庚午七月

右の趣為心得市・在へ可触知者也

庚午八月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午八月二日

右御達申候、以上

八月三日

廿老番組

御用伺

元町年寄給料納、先日御達申候通、毎月十日四時、老区限受取帳御  
拵、山下御門外小熊へ被遣、同人より受取書御取置可被成候、同日  
一と纏に包、世話懸受取、相納候間、呉々も無相違御取計可被成  
候、此段御達申候、以上

午八月四日

廿四番組 当 番

明治三年七月二十九日〜八月四日

明治三年八月四日、五日

右御達申候、以上

午八月四日

地主代

元町年寄給料納、先日御達申置候通り、毎月十日四つ時壹区限り受取帳御拵、山下御門外小熊へ被遣、同人より受取書御取置可被成候、同日一と纏め包世話掛受取、相納候間、呉々も無相違御取計可被成候、此段御達申候、以上

午八月四日

世話掛 当 番

右御達申候、以上

午八月十四日

御用伺 当 番

蚕種の義に付、別紙板本の通

市 中 年 寄  
地 方

民部省より被相達候間、市・在養蚕、且は蚕卵を製するもの、蚕種売買のものへ不洩様可申論もの也

但板本五拾五部相渡候事

庚午八月五日

東京府

右の通被仰渡奉畏候、以上

午八月五日

長沢次郎太郎

外三人

一、質屋

一、古着屋

一、古着買

一、小道具屋

一、古鉄屋

一、紙屑買

右渡世の者共名前取調、来る十八日迄に半紙・豎帳に相認め、当局へ可被差出候  
此段相達候也

午八月五日

断獄掛

半紙・豎帳片面三人宛

雛形

一、質屋  
兼業  
古着屋敷

何番組

何町 家持敷  
地借敷 誰

一、質屋

何町 同 誰

一、同

何町 同 誰

一、何人

何番組

一、古着屋

何町 誰地借 誰

右の通、一区一と渡世つ、各冊に致し、尤兼業の分、其奥書致し可書出事

鯨嶋東京府大参事

任 外務大丞

右

宣下に候事

右の通被 仰付候間、市・在不洩様可触知もの也

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午八月九日

多田内新助

外巻人

当社より差出候金札は、今般引替被 仰出、諸向両替屋にて引替相

成候に付、右の分出納方にては御受取不相成候間、町年寄給料其外

年賦返納の分、明後十日小熊へ持参の分、当社金札取交不申様、御

心付被成候、其余の義は、先日御達申候通、御取計可被成候、以上

午八月八日

当 番 世話掛

右御達申候、以上

八月八日

廿式番組 当 番

追々秋季桑茶植付の時節に差臨み候に付、諸邸上地諸買下け、或は  
拝借等に引渡候内、桑茶苗買入方難渋にて、事実差支及遅延<sup>マツ</sup>気節取  
失候ては不相成候条、右鉢難渋のものは、当月廿五日迄無遅滞、物  
産局へ可願出、若日限打過申出候ものは不及沙汰候事  
右の趣市・在不洩様可触知もの也

明治三年八月九日〜十七日

庚午八月

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午八月十五日

御用伺 当 番 受 印

三拾式番組 神田亀住町

同所竹町

右両町今般為火除取払相成、町銘相潰候

同組の内

神田松永町 合唱<sup>マツ</sup>  
同所式丁目

唱替  
神田松永町

同組の内

神田花田町 合併  
同所仲町三丁目

唱替  
神田花田町

右四ヶ町の内、今般為火除明地に相成、老町に難相立、合併の義、  
願の通被 仰付候

同組の内

神 田 栄 町

同所元佐久間町

同 所 亀 住 町

前書取払町々為替地と、里俗下谷御成道東側豊津邸上地跡被下置、

明治三年八月十七日(二十二日)

前書の通、町銘願の通御聞済相成申候

午八月十八日<sup>七</sup>

右組 年 寄

右御達申候、以上

午八月十七日

世話掛 当 番

各港在留の支那人竊々にて、男女買取、海外に可連越奸計相企候者有之、既に捕押に相成候に付、近日嚴重の御所置可有之候へ共、元来外国人へ御国民売渡候義、第一御国體におゐては不相濟事に付、向後地方官におゐて管内屹度取締相立、教育行届候様厚相心得可申、此段相達候事

庚午八月

右の通被 仰出候間、心得違致し、右鉢の所業および候もの及見聞候は、取押置年寄共へ可届出、万一隱置候義有之におゐては、無用捨嚴重の所置可有之候条、此旨市・在不洩様可触示もの也

庚午八月廿日

東京府

右御達申候、以上

午八月廿日

廿壺番組 御用伺 当 番

市中組々 年 寄 共

今般鴉片煙草の義に付、御布告の趣も有之候間、薬品取扱候もの、現在所持の分は品位・量目委細取調、来る九月十日迄に組々支配限り有無可申出事

庚午八月廿二日

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

八月廿二日

当 番 世話掛

右御達申候、以上

午八月廿二日

廿式番組 当 番

沽券絵図追々御差出の処、間数書入洩の分有之候間、以来御差出の分、入念読合書入落等無之様可致旨、常務局にて被仰渡候間、御達申候、是迄御印章相濟候分も、篤と取調、書入落等有之候は、申立候様御沙汰に御座候、以上

午八月廿二日

当 番 世話掛

市中地銘・惣名の境界へ傍示杭御建相成候に付、別紙切絵図御渡相成、右境界壺区四ヶ所少さく四角に、全紙四角に張差出候様、消防御掛より御談御座候間、左の廉々御心得、壺区御壺人つ、来る廿五日朝五つ時、詰所へ御出勤可被成候

但雛形左の通御認め、御持可被成候(図は次頁)

全紙印付札場所へ掛け札  
\*候\*

是より

東 何町通り

南

西

北

右御達申候、以上

午八月廿二日

世話掛 当 番

世話掛 中年寄共

盲人共本業は針治・導引、又は音曲の技藝にて、貸金銀高可致筋には無之処、近年猥に相成、不取締に付、去巳五月中廉々相触置候処、兎角貸金等を目論見、高利の取計いたし、貸金月賦入金并利足共借人へ受取書をも不差出者有之趣に相聞、実以不埒の事に候、然処より出訴に及候迄、双方曖昧の申立いたし、不都合の次第に付、以来金子返済元利に不拘、入金の節は、相互に屹度受書取渡置可申、若無其義及出訴候共、向後決して不取揚候間、心得違無之様可致右の通惣録へ申渡間、市・在共不洩様可申通もの也

庚午八月廿二日

明治三年八月二十二日〜二十三日

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午七月廿三日

小西喜右衛門

外壱人

右御達申候、以上

午八月廿三日

廿式番組 当 番

別紙雛形の通、非常の節相用候笠并提灯、先般何に付、為心得と相達申候、且持区町火消頭取共へは、寄々御達置可給事

明治三年八月

第三大区

総長 西川大属

取締掛 古谷権少属

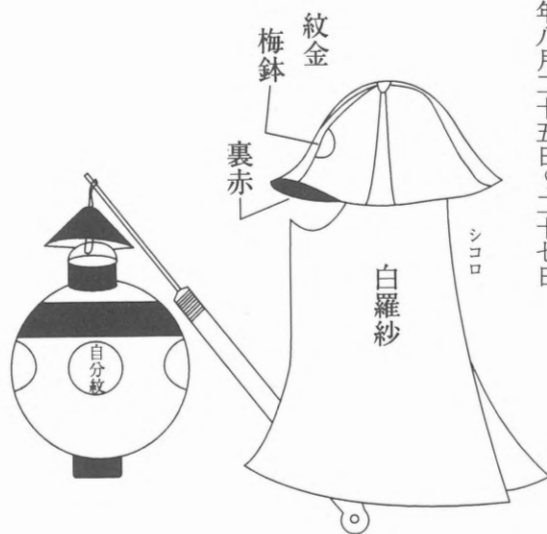
林雄介

田畑半蔵

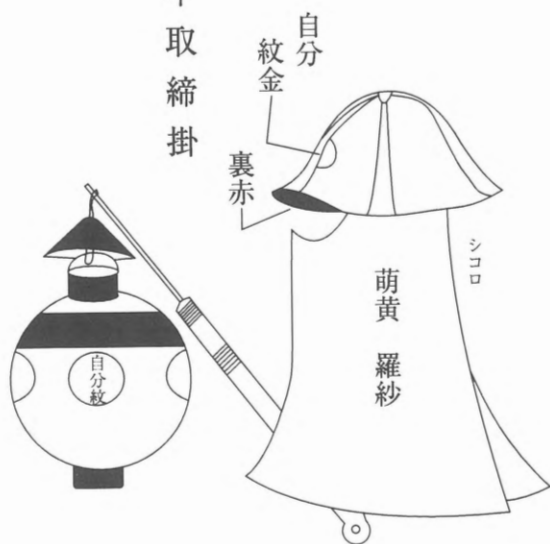
(図は次頁)

明治三年八月二十五日〜二十七日

総長



市中取締掛



賊難其外都て事変候義

東京府へ相届候は勿論に候へ共、当出張所へも可相届旨、先般相達置候義には有之候へ共、中には届も無之ものも間々有之、甚不都合の義に付、以来は本府へ訴不致程の少事とも一応は書取を以可被申聞事

右の通被 仰渡候間、此段相達候間、聊にても異変有之候は、、早々可申出候也

午八月廿五日

扱 所

町 触

近來所々借馬々場におゐて町人共打毬等相催、右勝負に事寄賭事<sup>かけ</sup>に紛敷義致候趣相聞、以の外の事に候、以來右鉢の義有之候におゐては、当人は勿論、馬主共迄嚴重の可及沙汰条、心得違無之様可致候、

右の通借馬渡世のものは勿論、市・在不洩様可触示者也

庚午八月

東京府

口達の覚

品川県管下東海道川崎宿の内、砂子町百姓九郎兵衛義、老人乗并式人乗人力車補理、東京・横浜往還渡世致度旨願出候に付、取調の上、願の趣承届、夫々取締向申渡候段、同県より達越候間、為心得

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午八月廿七日

山崎半兵衛  
益田金六

府下失産の輩、追々救育所入相願候者不少、鰥寡孤独老幼すはい  
またい  
れ疾当しつ  
みやか疾当しつ  
みやか  
にくむ

病は不得止の事情も可有之処、中には壯健にて虚を唱、救育を乞心得違のものも往々有之候に付、以来御規則相立、篤と取調の上、救育所入申付候間、願出候窮民有之候は、中・添年寄、地主の内差添、物産局へ召連可罷出候

右の通市・在不洩様可触示者也

午八月廿七日

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

八月廿七日

内田勘左衛門

外務省奉

外務省奉そとくさく  
上諭きようく前まへ于に各港府県あきく 曉さか示し在に  
該その港ところ清國人等しやうじんらう不得えく藏貯鴉片等あへん  
一いっ該その港ところ清國人等しやうじんらう不得えく藏貯鴉片等あへん  
二に該その港ところ清國人等しやうじんらう不得えく藏貯鴉片等あへん

因旋將買片烟之我國人及売付之、清國人等業已掇罪懲治在案昔此  
物入清國流毒害民以至今日之甚是不可思之也、為此

本政府新定妨害律例頒示通商各港府県＊に＊申諭在港清国商民

明治三年八月二十七日

嗣後＊し  
かはる  
かざる  
つく＊  
＊あきれる＊

有<sup>レ</sup>辜<sup>二</sup>犯<sup>一</sup>法在必行以<sup>レ</sup>熄<sup>二</sup>惡<sup>一</sup> 有<sup>二</sup>はん<sup>一</sup> 法<sup>二</sup>そく<sup>一</sup> 必<sup>二</sup>きん<sup>一</sup> 以<sup>二</sup>やむ<sup>一</sup> 惡<sup>二</sup>あく<sup>一</sup>  
 を凡<sup>レ</sup>清人素有<sup>二</sup>烟癮<sup>一</sup>刻難置共<sup>二</sup>管<sup>一</sup> を凡<sup>二</sup>せんに<sup>一</sup> 清<sup>二</sup>せい<sup>一</sup> 人<sup>二</sup>じん<sup>一</sup> 素<sup>二</sup>そ<sup>一</sup> 有<sup>二</sup>ある<sup>一</sup> 烟<sup>二</sup>えん<sup>一</sup> 癮<sup>二</sup>えん<sup>一</sup> 刻<sup>二</sup>こく<sup>一</sup> 難<sup>二</sup>なん<sup>一</sup> 置<sup>二</sup>おき<sup>一</sup> 共<sup>二</sup>とも<sup>一</sup> 管<sup>二</sup>かん<sup>一</sup>  
 箋者<sup>レ</sup> 箋<sup>二</sup>せん<sup>一</sup> 者<sup>二</sup>しや<sup>一</sup>

＊こしめこんぞうきよう＊  
 固不須言即量浅似喫白相者亦所嚴斷不准其來港宮生除將現住本  
 ＊えんきてつていせい＊ ＊ふさぎ＊ ＊かきむ＊  
 港烟鬼徹底清查其或自能戒斷吸喫以導  
 ＊さん＊ ＊ふだん＊ ＊のむ＊ ＊しんたう＊  
 禁令者可其不能者当即自行去此回鄉外奉到

新<sup>あらた</sup>論<sup>ろん</sup>律<sup>りつ</sup>例<sup>れい</sup>以後<sup>以後</sup>仍有<sup>なお</sup>潛<sup>ひそかに</sup>犯<sup>は</sup>大<sup>たい</sup>禁<sup>きん</sup>者<sup>者</sup>一<sup>一</sup>經<sup>きやう</sup>查出<sup>しで</sup>母<sup>はは</sup>庸<sup>よう</sup>分別<sup>べつべつ</sup>原<sup>もと</sup>住<sup>す</sup>新<sup>あらた</sup>來<sup>きた</sup>立<sup>たち</sup>刻<sup>とき</sup>按<sup>あ</sup>律<sup>りつ</sup>

処<sup>ところ</sup>治<sup>ち</sup>此<sup>こゝ</sup>時<sup>とき</sup>示<sup>し</sup>

匿<sup>かく</sup>

明治二年庚午八月

東京府

此度 御沙汰の趣、外務省より御触達の次第、先達て各港府県にお  
ゐて其港在留清国民共へ鴉片烟あへん持廻ひ申間敷旨、布告致し有之候  
砌、鴉片烟を買取候我国民并売渡し候清国民共其罪犯に依り、夫々  
御処置相成居候處、右鴉片烟の義、其荷清国に入しより、流毒害民  
今日の甚數至る事、其忤難捨置義に付、猶此度政府におゐて新に防  
害の律例被立定、諸開港場へ御布告相成、在港清国商民へ被触達候、  
上は、已後聊たり共禁令を犯し候者は屹度御法を正し、其毒源を絶  
ち可申候、就て清国人民の内、素より鴉片を嗜み、片時も離し烟  
癖ある者は勿論、仮令少し計の服量にて、徒にも用ひ候様の者に至  
る迄可為嚴禁條、右等の者は決て来港渡世致間敷候、尤此節在来

明治三年八月二十九日、九月三日

の内、右等の者精々穿鑿吟味を遂げ、断然嗜癖<sup>＊しへき＊</sup>を絶ち、嚴禁を守候者は格別、其儀不能ものは、速に立去り帰国可致候、右 御沙汰の趣触達し候後、尚潜伏罷在大禁を犯候者有之、及露顯候は、旧住・新渡無差別、其時々掟の通罪科に可被処者也

明治三年八月

東京府

市・在 組々 年 寄 共

鴉片禁令書去る廿四日、四拾七枚相渡し候、不足の分三百拾貳枚相渡候間、布告場へ無洩可張出事

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午八月廿九日

五拾区・地方共区内縮図差出し候様御沙汰に付、凡式厘目的にて道巾広狭御見計、一区限り美濃紙へ御認め、彩色に不及、二た通来月十五日迄に詰所へ御差出し可被成候、此段御達申候、以上

午八月廿九日

当 番 世 話 掛

来る四日鹿嶋社

御遙拝、同七日香取社

御遙拝被為 在候に付、当日

弁官以上并諸官省長官第九字参 朝可致事

但長官不参の節は、次官参朝可致候、尤重輕服者は政府出仕の輩

たり共可相憚事

庚午九月

太 政 官

右の通被 仰出候間、両日共火の元別て入念候様、市・在へ不洩様可触知者也

午九月

東京府

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午九月三日

御用伺 当 番

鴉片煙草の義に付、御布告有之候間、薬品取扱候者、現在所持の分、品位・量目取調、来る十日迄書上候様、先月廿二日被仰渡候處、右は鴉片煙草所持の儀歟、鴉片薬品所持の儀歟不分りの趣に付、相伺候處、煙草には無之、鴉片薬品の義に有之、薬種問屋は勿論、小売薬種屋・町医師等に至る迄、都て鴉片所持のものは、聊無洩書出し候様、小林様より御沙汰に付、認振雛形相添御再達申候、以上

半紙・豎帳

舶来歟和製歟

一、鴉片<sup>上品</sup> 量 目 何 匁

一、同<sup>中品</sup> 同 何 匁

一、同<sup>下品</sup> 同 何 匁



右の通所持仕候、以上

庚午九月 薬種問屋敷 町医師敷 何町——地借 何屋 誰印

如此当人より書上御取纏め、一区分合綴に被成、来る十日に詰所へ

御遣可被成候、無之分も御答書可被遣候

右御達申候、以上

午九月三日

廿壹番組

武家屋敷上地跡下水・石垣等取崩し申間敷旨、惣て御布告有之候  
処、此上右鉢の義無之様、最寄町々にて心付、若見掛け候は、相  
制、不取用ものは名・住所承り可申立旨、物産局にて被仰渡候間、  
此段御達申候、以上

九月四日

御用伺 当 番

右御達申候、以上

九月五日

廿三番組

深川仙台堀御蔵御普請に付、身柄の太工請負望のもの、明後七日正  
四時、新大橋町会所建添地へ罷出、御仕様帳拝見の上、入札致候  
様、毎区へ可申通旨、岡本大属殿被仰渡候間、御区限り身柄太工職  
へ行届候様、御取計可被成候、此段御達申候、以上

午九月五日

御用伺 当 番

当正月よりの町屋敷上地の地代、近々相納候様相達候に付ては、夫

明治三年九月三日～五日

迄の処、其町々地主又は身柄の者へ預置、日限相達候節に至り、上  
納方聊差支無之様可致旨、兼て上地差配人共不洩様、早々可申聞置  
候事

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午九月

星野又右衛門

外売人

麹町御救育所入の者、病死致候節、其区内へ御達相成、地主代御呼  
出、右死骸取置料金尅両御渡相成候処、右地主代御手当請取、是迄  
の店請人等召連参り、其者共へ右金子相渡、更に構不申、又は地主  
代不罷出、元店請人而已差出候町々も有之、其寺院へ回向料は勿  
論、穴堀代も差遣不申族も有之趣相聞、以の外の義に付、以来病死  
人有之地主代呼出候節は、無相違可罷出旨、其区年寄より急度申付  
候様、御同所にて御沙汰御座候間、此上行違無之様、精々御心付可  
被成候、此段御達申候、以上

午九月五日

世話掛 当 番

鉄道築造に付、高輪土手埋立并に品川の橋梁共工業相始候に付て  
は、明六日より来る十日迄入札為致候間、望のものは民部省鉄道掛  
へ可罷出候

右の通市中不洩様可触知者也

庚午九月

明治三年九月五日～七日

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午九月五日

村松源六

明八日越中嶋におゐて練兵

市・在組々 年寄共

天覧に付

還御迄組々中・添年寄は勿論、地主共持場々々繁々見廻、火の元  
厳重可申付候

右の通市・在不洩様可申通候

庚午九月七日

御道筋

大手より神祇官・大蔵省・和田倉御門左へ、辰の口土木司前通、常  
磐橋御門・本町通・通油町緑橋右へ、浜町河岸通菊間藩邸前脇、熊  
本藩邸・鳥居藩邸・新大橋右へ、万年橋・佐賀町河岸通・相川町・  
大嶋町・越中嶋調練場

壱 番組

三 番組

三 拾七番組

四 拾壱番組

四 拾八番組

四 拾九番組

中・添年寄共

明八日越中嶋におゐて練兵

天覧に付、御道筋町々心得方左の通

一、御通輦御間近に相成候は、往来差留可申事

一、御通行の節、男女共土間に平伏罷在可申事

一、同断の節、川々の通船差留可申事

一、同断夜に入候は、明家軒下へ桃灯<sup>(提)</sup>為差出可申事

一、同断往還掃除入念申付、風立乾き土吹立候は、時々水打可申  
事

一、同断明家二階の戸ノ可申事

但目張に不及候

一、並手桶表の間数に應し差出可申事

一、御道筋町々中・添年寄、地主共羽織・袴着用可罷出事

一、渡世相止に不及、且横小路板囲に不及、縄張にて人留可致事

一、御道筋葭簀張等差障分は取払可申事

但床見世差障無之分は、其俣商売為相休可申事

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午九月七日

会田正三郎

世話掛 中年 寄

町屋鋪上地を買下け受負拝借地、又は井戸・下水等修覆の節、願出  
候もの有之処、今般右上地の内、町会所へ引渡候場所も有之候義に  
付、昨六日迄右様の類願出候分は、都て一般に取消候事、右上地買

下け受負地には難相成候、拝借地に相願度もの并井戸其外修覆の義は、猶改て可願出事

但町会所金貸付有之候御地所は、同所へ可願出事

右の趣町中不洩様可申通也

庚午九月七日

右の通被 仰渡奉畏候、以上

午九月七日

長沢次郎太郎

右御達申候、以上

午九月八日

廿四番組 御用伺 当 番

大風雨に付、潰家・怪我人等其外事替候義も有之候は、至急取調、明後十日朝正五つ時、其区々より可差出旨、常務方より御沙汰に付、同刻與々無遅滞拙者共詰所へ、有無共御差出し可被成候、此段御達申候、以上

但格別事立候義は至急

御府御訴所へ、御届け可被成候、尤最寄武家地共御聞込の義は

可仰立候

午九月八日

当 番 世話掛

此達書今晚中五区行届候様、御取計の事、右御達申候、以上

午九月八日

廿五番組 御用伺 当 番

窮民相煩町会所御救相願候者共の内、格別の病氣にも無之、必至と

明治三年九月七日〜八日

窮迫不及ものを御救相願、米錢頂戴候由、御役人御聞込御沙汰御座候間、各様御見分御願立相成候義に付、右鉢の義は無之筈に候へ共、以来右等の廉篤と御調の上、御願立相成候様御取計可被成候、

此段御達申候、以上

午九月八日

町会所 年 番

右御達申候、以上

九月八日

廿五番組 御用伺 当 番

一、町々町入用入費兎角月々相嵩、右に付ては地主一統難済可致義には可有之候へ共、全事実の入費は致方も無之候へ共、居付地主・地主代にて能々致談判、可成丈け減少致、深切に世話可致事  
一、町々成田講或は秋葉講と唱、又は沓歩積金等名付、月々積金致し候町々も有之候へ共、右は町入用多分相懸候節、右積金を以差出し可申備に候哉、更に其儀も無之様子に付、以来右の積金等は一切相止め、其時々懸り高を以、割合候様可致  
一、町々書役給分増と唱、月々銀三百匁つ、町入用へ差出し候、是は給分増にては、余り多分の増方に付、元々差出し来候書役給分は相止め、可然居付地主一統談合可致

右の通、居付地主并地主代一統談合、精々入費減方取計可申事

庚午九月

右御申聞の趣、私共一同衆評仕、精々入費相掛不申候様、省略可仕候、以上

明治三年九月十日

明治三年九月 四谷伝馬町壹丁目 居付地主 源 助

外廿九人

深野長兵衛殿

嶋田次右衛門殿

七番組

外拾三組

右組々町々の内、一昨廿八日大風雨にて家作潰れ、困窮人へ町会所に御手当可被下御沙汰に付ては、常務方へ御書上不拘、潰家の難渋者而已御取調、家族名前・人数共無洩、明後十二日早朝御書上げ可被成候、此段御達申候、以上

午九月十日 町会所 年 番

市・在 組々 年 寄 共

明後十二日於越中嶋練兵

天覧行幸被

仰出候間、総て去る八日の通相心得可申事

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

庚午九月十日 御用伺 当 番

明後十二日越中嶋調練場におゐて

天覧、第九字

御出興と被 仰出候事

庚午九月十日

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

庚午九月十日 御用伺 当 番

新大橋向 町会所  
建 添地におゐて御規則書写

物産仕法局張出しの写

一、貸附金高の儀は、老人に付、金百両以上の定致置候事

但利足は金百両に付、壹ヶ月利金壹両の割

一、拝借相願候時は、証人相立可申事

一、蔵入品物出入、又は水揚人足共、総て拝借人にて取扱可致事

但荷物品物に寄、持込に不及、見分の上、其場所に置据候俟、

御貸渡相成候事

一、貸附期月は三ヶ月限に相定、拝借・返納共、利金は壹ヶ月の中

十五日以前、後利減可致事

但三ヶ月内返納の期月は、拝借人申出次第可申付、返納定日

は月々廿五日限の事

一、引当品物期月に至り、請戻不申節は、証人為立会入札払致し、

元金引去り不足致候節は、当人并証人より弁金可致、若元利引去

り残金有之節は、下け戻し候事

但事実無拠次第にて、暫時置据相願候節は、時宜に寄、元金

三步一を為相納、壹ヶ月或は式ヶ月間届可申事

一、荷物品替の義相願候共、不申付候事

一、古金銀并通用金銀共預り不申候事

一、正金・金札・商社札共有合に随ひ貸渡之

一、返済の節も、貸渡候節の正金・金札にて為納候事

一、鼠喰・湿気・濡等の義は、無之様手当可申付候へ共、万一の義

有之節は、荷主可為損失候事

一、天災・火難等は両損に取計候事

右の通相定候也

庚午九月

用紙美濃

拝借金証文の事

一、金——也 利足金百両に付、壹ヶ月金壹両の割、何月より

何月迄三ヶ月限御定

此引当

右は商用為融通、拝借仕候処実正也、返済の義は、御規則の通急度上納可仕候、若期月等閑候は、引当の品物御払被成下、万一金子不足仕候は、証人引受并納可仕候、為後日証文奉差上候処、仍如件

庚午何 月

拝借人 ——— 印

証人 ——— 印

物産御仕仕方 御役所

物産御仕法局御貸附金規則書、別紙写の通、岡本新四郎殿御渡被成、区毎寄々可申通旨被 仰聞候間、此段御達申候、以上

明治三年九月十三日〜十七日

庚午九月十三日

当番 世話掛

右御達申候、以上

庚午九月十三日

廿三番組 御用何 当番

右御達申候、以上

庚午九月十四日

地主代

町 触

\*張出し\*  
一、市中往還等に迷子有之、町内より訴出候節、四五歳以上の分

は、人相・恰好等委細相認め、其町内并芝口町懸け札場、又は一

石橋・浅草観音・湯島天神迷子知るへの碑へ、張札致置候間、心

当のものは当府へ可申出候

庚午九月

東京府

右の通御布告被仰出候間、此段御達申候、以上

午九月十五日

世話掛 当番

市・在共沽券絵図面に認め候惣坪、一区限り雛形の通御認め、明後十七日朝五半時迄無間違、拙者共詰所へ御書出し可被成候

右は消防御懸より至急の御沙汰に付、此段御達申候

午九月十五日

世話掛 当番

半紙・縦帳

一、惣坪何万何千何百何拾坪

右の通巷区限取調申上候、以上

午九月十七日

何番組 中・添年 寄

明治三年九月十五日、十六日

兼々御布告の通、毎年九月廿二日の義は

天長節と相唱、現に

皇国を御治め被為 在候

天皇の御降誕日に付、群臣に酒肴を賜、天下の刑戮をも被 差停、

御祝被為 在候義に候へは、凡天下の士庶可奉祝は勿論に候へ共、

当府下の義は、輦轂の下別て小前末々迄

御慶辰可奉祝もの也

右の趣市・在区々申通、不相洩様可申論もの也

庚午九月

東京府

口達の覚

世話掛 年 寄

近頃市中茶屋或は船宿等にて、旅人止宿為致、旅人宿渡世の者に差  
響難洪の趣申出候へ共、右は兼て御触面も有之、右様の義は無之筈  
に候へ共、自然心得違のもの有之哉も難計候間、其筋々へ取調方相  
達置候間、各区支配限内密取調可申出事

庚午九月十五日

常務局

別紙の通茶屋・船宿等にて旅人止宿の義に付、御口達有之、内密御  
調否哉、来る廿日拙者共詰所迄、御書取可被遣候

但茶屋・船宿に限候義には有之間敷、兼て御触面に相振れ候義  
は、御調洩無之様御心得可被成候

庚午九月十五日

世話掛 当 番

右御達申候、以上

庚午九月十五日

廿四番組 御用何 当 番

右御達申候、以上

庚午九月十六日

塩 沓 地主代

〔貼紙上〕  
\*地獄一件落着、御心得迄御達申候間、不都合の義無之様御承知可  
被下候 \*

一、徒場へ被遣候

売女当人

一、三拾貫過料の上、百日手鎖、隔日改め

同宿井に

一、急度叱り

差配人

一、押 込

中・添年寄

但徒場とは元寄場佃嶋（マ）の事

〔貼紙下〕  
\*御心得迄地獄落着御達申上候間、不都合の義無之様御銘々御承知  
可被下候、以上 \*

一、銭三貫文過料の上、手鎖百日、隔日改

売女当人

一、急度叱り

同宿人

一、押 込

差配人

一、徒場へ被遣候

地主代

\*元人足寄場の事\*

地獄当人

午九月十七日

当番世話懸

東久世殿  
御用

四谷塩町老丁目 家持

味噌問屋  
春米渡世 五兵衛

御府御呼出もの、兎角遅刻の向も有之候に付、以来中・添年寄にて心付、遅滞無之様可申通旨、断獄局より御沙汰に付、御区々町々御申聞可被成候、此段御達申候、以上

午九月十四日

世話掛 当番

右御達申候、以上

庚午九月十五日

廿四番組 御用伺 当番

府下諸往来草取・掃除の義に付、此度諸官員・諸藩へ嚴重御達の趣も有之間、桑茶植付の為上地又は明地等買下け拝借致居候地所にて、往来へ接つく候場所は、往還中英を堺と相心得、至急草取・掃除等行届候様通達の事

右は物産局におゐて柳沢弥右衛門殿・伊藤惣吾殿御立会、被申渡候間、此段御達申候、以上

午九月十九日

御用伺 当番

右御達申候、以上

午九月十九日

廿四番組 御用伺 当番

市中町人共の内、宮・華族方用達被申付、懸札等差出し候者有之哉、至急取調可申上旨、常務方御沙汰に付、毎区御取調当人名前右懸け札共御書取、明後十九日無間違詰所へ御差出し可被成候、以上

明治三年九月十四日・十九日

右のもの義、去巳年四月中より東久世様御飯米春入致罷在候処、蝦夷地開拓に御越相成、当時同家御屋敷へ味噌其外御飯米等僅相納罷在候へ共、絵符は頂戴罷在候

三条殿御邸へは、当五月中より御弁当米春入

御用致罷在候、尤御同所へも絵符御渡相願居候へ共、未だ御渡に相成不申候由に御座候

右取調申上候、以上

午九月十九日差出申候

廿四番組 年寄共

区々上地の内、今般町会所へ御引渡相済、其区内より同所へ絵図面御差出の分、来る廿三日より最寄マツにて、御役人中右地所御見分有之候間、其砌右地所書上げ、表裏地代并当正月分町入用差引金上り高過不足御認め、御見分先へ御差出可被成候

但御見分の節、差懸り御区内扱所へ向け御出役有之候間、其町内居合候地主代の内、案内致候様御申付置可被成候

右は御掛り御役人中被 仰聞候間、此段御達申候、以上

午九月十七日

町年寄 年 番

明治三年九月十七日〜二十日

右御達申候、以上

午九月十七日

当番 廿五番組

旧幕府より受領又は拝借致居候町屋敷土地の分并朝臣被 仰付候

者、都て町屋敷受領、改て拝借等致居候者、町銘・坪数・名前委細  
取調、土地の方は其頃の役名、受領地・拝借等の分は当時の肩書に  
致し、一区毎受領地と土地と別帳に仕分け、半紙・竖帳に認め、来  
月十五日迄に可差出事

但今般町会所へ引渡候地所并に昨年中買下け、受領地に相成候地  
所も前書同様坪数・元受領主の名前可書出候、尤買下け受領地  
に相成候分は、何町誰買下け、又は受領地と申義朱書にて可認  
入事

一、元用達町人并無役町人の内にて受領地・拝借地罷在候分も無洩  
取調、願済の有無朱書にて認入、是又別帳に認め可差出事

庚午九月

右の通被 仰渡奉畏候、以上

九月十八日

矢部 与助

外売人

町屋敷土地の内、官員并士族・卒の向にて新規に拝借又は拝領に相  
成候地所も有之候に付、委細取調、当月晦日迄に可差出事

庚午九月

右の通被仰渡奉畏候、以上

九月十八日

矢部 与助

外売人

濁酒新規定立相願候者、御聞済に相成候間、願出度者は中・添年寄  
奥印の願書を以可申立、且是迄石数多造立者の内、事実難渋等にて  
減石相願度者は、式拾石迄の減石御聞済相成候間、前同様可申立、  
尤減石相願候ものは、桶相改・焼印改御打渡相願候様可致旨、出納  
方にて被仰渡候間、此段御達申候、以上

午九月廿日

星野又右衛門

長沢次郎太郎

市・在 年 寄 共

府下諸往来草取・掃除の義に付ては、当七月中相達置候処、於今に  
往来の内諸邸持場の分荒蕪、或は塵芥取捨有之場所も相見、甚不都  
合に候間、総て往来に接候屋敷持場の分、一般掃除行届候様、猶亦  
諸藩邸其外へ相達候に付、往来中央を境とし、掃除行届候様、組々  
支配限り可申通候事

庚午九月

右の通被 仰渡奉畏候、仍て如件

午九月廿日

御用伺当番 会田正三郎



市 中 地 方 世 話 掛 中 年 寄

来廿二日天長節為御祝義と、市中組々中・添年寄礼服用着、朝第七  
字府庁へ可罷出者也

但重服者出頭可憚事

当朝府庁より酒肴被下候事

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午九月廿日

世 話 掛 村 松 為 溪

地 方 金子平右衛門

右御達申候以上

午九月廿日

廿 老 番 組 御 用 伺 当 番

来る廿二日山下御門内元山口・佐賀藩邸におゐて、自今共調練并発  
炮有之候条、為心得相達候、右市・在不洩様可触知者也

庚午九月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午九月廿日

当 番 御 用 伺 印

張出し

自今平民苗字被差許候事

庚午九月

太 政 官

右の通被 仰渡候間、市・在不洩様可触知もの也

庚午九月

東 京 府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

明治三年九月二十日、二十三日

午九月廿日

当 番 御 用 伺 印

右御達申候以上

午九月廿一日

廿 老 番 組 御 用 伺 箕 輪

右廉々御達申候間、御銘々差配内表裏店々へ無洩御申通可被成候、  
以上

庚午九月廿一日出す

地 主

清	吉殿	惣	七殿	兵	藏殿	庄三郎殿	庄	吉殿
忠兵衛殿	藤	七殿	鉄五郎殿	甚右衛門殿	安兵衛殿			
庄次郎殿	五兵衛殿	五郎兵衛殿	金兵衛殿	喜兵衛殿				
嘉	七殿	珍	平殿	秀次郎殿	安右衛門殿	清次郎殿		
富田氏	神取氏	相木屋氏	富山氏					

今廿二日

市・在 組々 年 寄 共

天長節に付、東京品川沖開港場砲台并軍艦におゐて、炮数貳拾一発  
祝炮有之候間、為心得と相達候事

庚午九月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

九月廿二日

嶋 田 藤 一

深川御蔵建添地御構柵・矢来御修覆に付、請負望のものは、明後廿  
五日正四つ時御同所へ罷出、御仕様帳熟覽、場所見分の上、同廿七

明治三年九月二十三日〜二十八日

日町会所へ入札持参、即日開札の積、毎区へ行届候様御取計可被成候、右は御役人中被仰聞候間、此段御達申候、以上

庚午九月廿三日

町会所 年 番

右御達申候、以上

午九月廿三日

廿四番組 御用伺 当 番

駅通司御用人足受負方の義、追々願出候も有之候へ共、兎角賃銀区々にて不都合に付、改て入札申付候間、望者は左の振合に相心得、来月五日四つ時無遅滞当府常務局へ入札可差出事  
(の脱カ)  
壹ヶ月入用高平均  
一、凡人足式百五十拾人

口宿四ヶ宿持出し

人足 壹人 但 壹人に付 七貫目持

此賃銀何程

人足 壹人 但 同 七貫目以内

此賃銀何程

右同断御用状の分

急歩 但 口宿迄 時間 九分五厘

此賃銀 何程

至急歩 但 時間 七分六厘

大至急歩 但 時間 五分七厘

此賃銀何程

右の趣、業の者は勿論、市・在不洩様可触知もの也

庚午九月廿八日

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍て如件

午九月廿八日

御用伺 当 番

右御達申候、以上

午九月廿八日

廿壹番組 御用伺 当 番

差上申一札の事

何番組 何町 誰 店

誰

午何才

右は今般紙製所へ職方御雇被 仰付、難有奉存候、給料の義は、職業の巧拙に依て、御規則の通御渡被下候段、難有奉存候、然る上は御法則の通急度相守、万一当人不正の儀有之節は、証人引請御役所へ御迷惑の儀、一切為仕間敷候、為後証人請一札奉差上候、以上

年号 月 日

右 当 人 誰 印

右引請証人 誰 印

授産場 御役所

何町何町目 何兵衛店 何兵衛

妻 名

梓 名

印 割

娘 名  
四人

右の者、職業に基き、出院願出候間、差支の廉も無之候は、人別  
差送候ても不苦候事

年号 月 日

三 田 救 育 所 印

何十番組

御教育所在留の者、産業仕覚弁利の方へ店持渡世相立、又は通稼致  
度旨当人任願に、取調の上、出院被 仰付候に付ては、別紙の通書  
付御渡しに相成候間、復籍致、送籍等無差支取計可申、尤自今其度  
々年寄呼出し可相成の処、御用多の義に付、惣区へ達し置候様、御  
掛御役人中被仰聞候間、此段御達申候、以上

庚午九月廿七日

拾五番組

拾六番組

深川元加賀町

組合持地借	平	吉
同 町 家 持	三	郎 次
同 町 組合持店	栄	蔵
同 町 平吉地借	そ	て

其方共義、去る七月十九日大風雨にて出水の節、居町地低の場所は

明治三年九月二十七日、二十九日

床上迄水上り、一時の義とは乍申、其日稼の貧民共困苦の程憫然と  
存、平吉は金三両、三郎次・栄蔵は同式両つ、そでは同式分施差  
出候段、寄特の義に付、一同誉置

右の通被仰渡、難有仕合に奉存候、仍如件

明治三年九月廿九日

右 一 同 受 印

右の通、早々張出し可申通被仰渡奉畏候、仍如件

午九月廿九日

佐藤忠右衛門

地方四番組 丸沢喜三次支配 浅草寺領 畑・屋敷

先村方の義は、先般喜三次支配に被仰付候間、為心得と御達申候、  
以上

午九月廿八日

右 組 世 話 掛

右御達申候、以上

午九月廿九日

廿式番組 当 番

(表紙)

\*本紙美濃紙堅帳\*

御 請 書

何町何丁目  
何の誰



一、表間口 何間 何の誰 触下 何の誰

裏行 何間

此坪 何拾坪

何町何番受領地

一、表間口 何間

裏行 何間

此坪 何拾坪

右の通取調申上候、以上

庚午十月

何番組 中・添 年寄 共

\*上地の分\*

何町何番上地

一、表間口 何間

裏行 何間

此坪 何拾坪

何町何番上地  
一、表間口

何間

元何役 何の誰

裏行 何間

此坪 何拾坪

\*但町会所へ御引渡相成候分\*

何町何番上地  
一、表間口

何間

元何役 何の誰

裏行 何間

明治三年十月五日

此坪 何拾坪

\*但何年何月何町家持誰義 買下け願済相成申候\*

\*之通\*  
右取調申上候、以上

庚午十月

何番組 中・添 年寄 共

\*元用達并無役町人の分\*

何町何番上地  
一、表間口 何間

元何御用達 何の誰

裏行 何間

此坪 何拾坪

\*但何年何月右誰受領  
何町何番上地  
一、表間口 何間  
拝借願済相成申候\*

何町人 何町人 何の誰

裏行 何間

此坪 何拾坪

右の通取調申上候、以上

庚午十月

何番組 中・添 年寄 共

濁酒造新規相願候ものは、来る十日限り可願出、其後願出候ては当年造込間合無之に付、呉々同日を限り申立候様、出納方にて被仰渡候間、此段御達申候、以上

庚午十月五日

星野又右衛門  
長沢次郎太郎

右廉々御達申候、以上

明治三年十月五日〜十二日

庚午十月五日

式拾五番組 御用伺 当 番

### 会議規則

一、毎月集会八の日に相定、市中・地方、中・添年寄一同朝第九字に出席の事

但座順は肝煎、世話掛、中・添年寄等の差別不相立、着到順を以座順相定め候事に候、且会日病氣差合、或は不得止公務あらば、其事柄を半紙・堅帳に認め、当人調印の上、当日十字迄に会議懸へ是を達し、尤欠席のものは、評論會議人に託し可差出事

札け下

札け下

明八日は差支に付、追て替日可相達事

一、毎会議案を相渡候間、各写取、次会に評論を加、差出し、異同を討論し、猶又熟考の上、可否を決すべし、尤時宜に寄差向候輕事は其事柄の類末を書面に認め、机上に差置候間、番号の順席に随ひ罷出、熟見の上、否可を述べし

但評論書取の義は、情実を主として大綱丈け一打ヶ条にいたし、長文不相成様可相成丈け贅言・文飾を省き、平仮名・片仮名成共銘々都合次第相認め、実情も徹底するを主趣とし、猶委細の義は口上にて可申立事

一、集議評論の次第に寄、議案を改正し、再三集議に付すべし

但議の決答を集て之を点検し、可否の人員を揚示べし

一、柏子木三声を以會議席に就き、會議中柏子木一声を以議論を止め、二声打候へは控所へ退き、休足致し、総て柏子木三声・二声を以進退致、四声を以退散すべし

但會議終候共、退散の柏子木聞ざるうちは退散不相成事

一、町方改革、或は貧民救助筋、府給の体裁、土地の風俗、商法筋、新規発明の仕法、其他百般の事業に付、見込の有之ものは、無忌諱十分に相認め、十一字迄に會議懸へ可差出事

一、夷人苛酷の所置有之歟、或は冤罪なる者、又は官吏の正罪を論する等の事柄は、封書を以姓名を認可差出、是は知事・大参事の外他人是を披見するを許さず

一、市・在より建白致候もの事柄に寄、會議席へ呼出し、直尋候義も可有之事

庚午十月

往来道筋草取・掃除の義、兼て御布告有之候に付、先達て相達置候へ共、桑茶御払下け地の内、草取・掃除等無之、中には開墾の為草芥等取除け往来へ積置候場所も有之、府下体裁も不宜候間、銘々地境を見切、往還中央を境として早々草取、芥等取片付、掃除行届候様市・在不洩様至急達方可取計候事

庚午十月

東京府 物産局

右掃除の義、先達て御沙汰有之候処、兎角等閑、中には取草を往還へ投出し、又は地所内へ積置候場所も相見え、甚不行届に付、右様掃除・手入等不相届、持あますものは上地可致旨、嚴重被 仰渡候処、御区内限り桑茶御払下け地所持の者へ、稔と御申付、受印御取置可被成候、此段御達申候、以上

午十月十二日

御用伺 当 番

右御達申候、以上

午十月十二日

廿五番組 当 番

世話掛 年 寄 共

産物取調有之義に付、別紙の通被 仰出候間、府下市中におゐて出産の品類、別紙雛形に倣ひ、凡平均一歳の総額取調、来る廿日迄に可差出事

但商社製造の味噌・醤油・徒場油（タマ）のごときは其管轄所にて、取調候筈に候事

庚午十月

右の通被 仰出候処、調方目当相遅候間伺候処、他国品にても御当地にて製造仕出し候品は、無洩取調、書上可申御沙汰に御座候、廉多に付、荒増の品書別紙相添、調方及御打合候、右品書の外にも相洩候分は、御書出し可被成候

但老区限り何品、老ヶ年の出来高束ね、一て打にて御書出し、職人名前等御認めに及不申候、且受売の分は御調出し不及候

明治三年十月十二日

庚午十月十二日

世話掛

御当地にて製造の分

傘 下駄・草履

たわし

竹細工  
籐細工  
籠の類

塗物  
わらんじ

箒

羽根細工

揚弓

弓師

刀鍛冶

鍛冶  
包丁・小刀  
鋏・鎌其外

乗物

大八車  
人力車  
自転車

馬具一式

烏帽子

地漉紙

麻裏草履  
藁草履

鼻緒

させる

筆

油

地掛蠟燭  
問屋可尋

飾屋  
仕込品数々

錦 絵扇  
問屋可尋

練油  
問屋可尋

鞘師

彫物師

鼈甲職細工

花かんさし

地雛人形類

織物  
帯地の類

紙煙草入

袋物類

木具類  
さし物

足袋引  
腹懸け

十露盤

桶類

経師

すたれ  
竹  
よし

三味線

琴  
機

明治三年十月十二日〜十六日

濁酒 檜物

建具

銅鉄細工 翠簾

元結

水引 畳の床

右御達申候、以上

午十月十二日

当番 廿五番組

一、家税上納の義は、来る十七日迄に無相違可差出候事

午十月十三日

廿四区 扱 所

一札の事

一、拵付木柄合口脇差

忝本

ノ

右は当三月中、麴町拾貳丁目往還にて、私夫吉兵衛義拾ひ取候に付、其段同町へ申出候処、右品持参、当三月廿六日御訴申上候へは、品物御取揚に相成候処、今七日東京府御白洲にて、訴人へ被下置候旨、同町地主代多平殿品持参被致候趣被申聞、右品御渡被下置、難有慥受取申候、依之差出申一札、仍如件

明治三年十月八日

四谷塩町老丁目 拾番の地借店

吉兵衛後家 て つ(爪印)

差配人 大嶋鉄五郎 ㊞

地主代 原 徳兵衛殿

「(別紙) 覚

一、木柄合口

忝本

代金 忝分式朱也

右品紛敷物に御座候間、何程直段にて候哉、引取直段御記可被下候

午十月十六日

四谷塩町老丁目 地主代

大嶋鉄五郎 ㊞

原 徳兵衛 ㊞

道具屋衆中

中・添 年 寄 共

来る十五日外神田鎮火社御鎮座に付、同日未中刻当府より

御霊出御、御道筋別紙の通相成候間、御道筋横町共御通り差掛り、葬式又は不淨の者不行逢様、其外往還等総て不敬無之様取締方精々心付可申付事

右の通り持場限り無洩様可触知者也

十月十三日

御道筋

一、当府表門より山下御門・山下町・南鍋町・尾張町左へ、銀座

町・京橋・日本橋通り・筋違御門右へ、神田花田町・河岸通

り・御社

去る巳年東京府下一時融通の為、為替会社に於て、銀三匁七分五厘の預り手形、製造願出流通被 差許候処、遠在へ散布追々引替候へ共、未だ引替残有之趣に付、所持の者は来る十二月限り取纏、東京



元大坂町為替会社へ差出可申、若期限後差出候分は、一切引替不相成候事

庚午十月

大藏省

右の通、市・在不洩様可触知もの也

午十月十四日

市・在世話掛 年寄共

公事出入呼出刻限及遅延候は、其当人は勿論、町役人共等閑故の義、以の外不埒の至に候、以来朝四つ時を限、訴答着可相届、若延刻或は不参におゐては、嚴重可及所置候間、兼て其旨中・添年寄共厚説諭可致事

但来廿二日より、本文の通可相心得事

庚午十月十七日

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午十月十七日

村松 為 谿

長沢次郎太郎

右の通、常務方にて被 仰渡候間、此段御達申候、以上

庚午十月十七日

廿四番組 御用伺 当 番

右の通同年寄衆より被申渡候間、此段御達申候、以上

午十月十八日

月 番 地主 共

狩野清吉殿 上原惣七殿 安村兵藏殿

明治三年十月十四日〜二十五日

砂賀庄三郎殿 堰沢庄吉殿 渡辺忠兵衛殿  
山田藤七殿 大嶋鉄五郎殿 堀安兵衛殿  
市川甚右衛門殿 高橋庄次郎殿 森五兵衛殿  
小林五郎兵衛殿 山田金兵衛殿 吉田喜兵衛殿  
宮澤嘉七殿 吉祥珍平殿 山口 中村安右衛門殿  
伊藤清次郎殿

四谷塩町壱丁目

一、刀鍛冶

拾八番地借店 岩上鉄次郎

壱ヶ年 大小拾通り

同 町

一、桶 類

拾三番借地 新開 定 吉

壱ヶ年 大小取交百弍拾

同 町

一、傘 壱ヶ年出来高

拾弍番借地 白鳥惣左衛門

大小取交凡三百本

右取調申上候、外々無御座候、以上

午十月廿日

右 町 地主代 原徳 兵 衛

組々 世話掛 年寄 共

養蚕は民富至要の業に候処、其仕法基く処不一定、往々其制を誤り、終に産業を失ふ者も有之哉の趣、実に嘆は敷事に付、別冊仕法

明治三年十月二十五日、二十六日

書三部つゝ、及配達候、管内不洩様致布令、早々為相試候上、可否又は  
発明の説等有之候は、巨細可届出、且是迄の制法も詳細相記し、来  
七月限可差出、此段相達候事

午三月

民部省

右の通市中不洩様可触示者也

午三月

右の通当三月中相触置候処、今以何たるも不申出、甚不都合の次第に  
付、来る閏十月限試検・発明の有無共、忝区急度申出候様可致事

庚午十月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午十月廿五日

村松為谿

星野又右衛門

一、会議定日已来九の日と相心得候様、可申通旨、御掛方より御沙汰  
に付、御達申候、以上

午十月廿五日

会議掛

上洪谷村 西條藩邸

右屋敷・家作御下け相成候間、望の者は明後廿七日東京府邸宅御  
局へ罷出、名前書差上、右屋敷絵図面拝見致候上、猶場所見分可致、  
尤入札日限の義は、其節御申渡有之候旨、同御局横田広三郎殿御談御  
座候

右の通早々申通候様御沙汰に付、至急此段御達申候、以上

庚午十月廿五日

廿四番組

拾五番組の内

芝金杉仲町

同 浜町

合併

芝金杉浜町

右は先般鉄道御用地に付、聞小間相減、以来冗費省方の為、地主共  
願の通り両町合併、書面の通り相唱候間、此段御達申候、以上

庚午十月

右組 年 寄

右御達申候、以上

十月廿五日

廿四番組 当 番

右御達申候、以上

午十月廿六日

月 番 地 主

四谷尾張町 沓番地差配人 宮崎栄吉

其方儀、当九月晦日居町出火の節、類焼致候もの共の難渋を相察  
し、都合三拾七軒へ金沓分つ、施差出し候段、寄特の義に付、為褒  
美と鳥目五貫文被下之  
右の通被仰渡、難有奉頂戴候、仍如件

明治三年十月廿五日

右 宮崎栄吉

右御達申候、以上

地主代 米山和七

庚午十月廿五日

御用伺 当 番

人力車発起人并

加入人一同

其方共渡世人力車の義、是迄発起人へ加入の上、場所等割にて出稼致し来候処、渡世の者数多に相成、一般の融通に不相成哉に相聞候、右は以来、発起人へ加入不及、銘々勝手次第の場所にて相稼不苦候間、兼て申渡置候規則の趣厚相心得、都て正路に申合、何れも渡世に相附候様可致

但本銀町老丁目拾七番借地高山孝助外式人は、人力車発明に付、追て沙汰の品も可有之候へ共、夫迄の処、人力車惣行事申付候条、不都合無之様相心得、以後同渡世新規願出候もの有之節は、願書へ加印致し可申、右に付猥々間敷義等決て無之様可致右の通被仰渡奉畏候、為後日仍如件

庚午十月廿七日

右人力車発起人

本銀町老丁目 拾七番借地 高山孝助

同

呉服町 三拾貳番借地 鈴木徳次郎

同

明治三年九月二十五日〜二十八日

右加入人惣代

箔屋町 五拾八番借地 加<sup>(和)</sup>泉要助

桶町老番借地 野坂銀次郎

外老入

世話掛 年寄共

午十月廿七日

人力渡世の義に付、別紙の通申渡間、向後新規右渡世相始度ものは、同渡世惣行事加印改、直に当府へ願出候様、組々通達の事

庚午十月廿七日

小西喜左衛門

外老入

陰陽師・売卜者附属地等に住居罷在、戸籍御調の節、相洩候分有之候は、加籍の義可被仰立旨、過日御達御座候処、未た御申立に不相成分も御座候に付、早々可申立旨、戸籍御懸にて被仰渡候間、此段御達申候、以上

午十月廿七日

御用伺 当 番

断獄方にて御裁許済、代金渡し御達の義、翌朝御用伺の者へ御下渡相成候様、断獄方へ申立候処、御聞済相成、以来翌朝御達有之候間、行違無之様、御心得可被成候、以上

明治三年十月二十八日、二十九日

午十月廿八日

当番世話掛

明廿九日会議に付、九字迄に御出勤、直に南部邸へ御出、名前帳へ

御記、同所へ御控へ可被成候、以上

午十月廿九日

会議掛

右御達申候、以上

午十月廿八日

廿壺番組

昨日別紙の通被 仰付候に付、此段相達候也

午十月廿九日

第三大区 出張所

拾九番組

廿壺番組

廿貳番組

廿三番組

廿四番組

中・添 年寄中

是迄の掛被免、断獄掛可相勤事

西川大属

和仁増蔵

判仁東京府権大属

和仁権大属

第三大区総長可相勤事

右御達申候、以上

庚午十月

午閏十月朔日

月番地主

狩野清吉殿 上原惣七殿 安村兵蔵殿

砂賀庄三郎殿 堰沢庄吉殿 渡辺忠兵衛殿

山田藤七殿 大嶋鉄五郎殿 堀安兵衛殿

市川甚右衛門殿 高橋庄次郎殿 森五兵衛殿

山田金兵衛殿 小林五郎兵衛殿 吉田喜兵衛殿

宮沢嘉七殿 吉祥珍平殿 山口安右衛門殿

伊藤清次郎殿 吉祥秀次郎殿

富山氏

相木屋氏

神行氏

富田氏

上地・諸開墾買下け地内にて、枯草・芥等焚捨煙立、出火に見紛候間、向後塵芥捨場無之、焚候節は、其已前御届け可申上旨消防御懸より御沙汰御座候間、御区内限り開墾地所持の者へ不洩様早々御申通可被成候、此段御達申候、以上

候

但町地明地等にて右様の義有之候は、是又御届け御差出可被成

午十月廿九日

当番世話掛

寺院除地并町人にて除地拝領致居候者の内、地所他人へ永借等為致、今日に至り取返し候工夫無之、依て右除地改て沽券地として売買致、町入用諸役共差出候義、聞届に相成候類例、右組々取調、有無共来月三日可申立事

午十月廿九日

常務局

右御答書同日、無相違詰所へ御差出し可被成候、以上

午十月廿九日

当番世話掛

市中・地方年寄

町方并百姓地へ接溝・堀・下水等は迄御入用を以、浚方等有之場所取調、組々より来月八日迄に可差出事

午十月廿九日

常務局

濁酒新規願・減石願共、来る八日以後は一切御受取不相成候間、相願候ものは、右日限迄に御差出可被成候、此段御達申候、以上

閏十月二日

濁酒掛

人力車の義、以来銘々勝手次第の場所にて相稼不苦、尤願出候もの有之候は、惣行事本銀町壹丁目拾七番借地高山孝助外式人は、願書へ加印致し候様、去る廿七日被仰渡候処、追々願出度心得の者も多く御座候に付ては、惣行事三人の内、最寄にて壹人加印為致候は、御聞届被為在候積仕度、此段申上候、以上

明治三年十月二十九日、閏十月五日

閏十月二日

世話掛 中年寄共

御付札  
書面の通惣行事へも相達候事

右御達申候、以上

閏十月二日

武拾貳番組 当番

麴町救育所に有之候

倭米 五石六斗八升

支那米 八拾壹石壹斗五升貳合五勺

但白米

右御払相成候間、来る五日同所へ罷出、品見分の上、同七日町会所へ入札持參可致候、尤即日開札の事

右の通惣区其筋渡世のものは勿論、望のものへ早々、行届候様御取計可被成候、以上

閏十月三日

町会所 年番

右御達申候、以上

閏十月三日

廿壹番組

百坪に付

武家地地位坪当り、先達て御調御差出の通、半紙・縦帳に御認め、来る十日迄詰所へ、五区御当番にて御取集め、御差出可被成候、以

明治三年閏十月五日、七日

上

（マ）  
午十月五日

当番 世話掛

右御達申候、以上

午閏十月五日

御用伺 当番

東京府下、上水の義、以来都て民部省土木司にて御取扱に付、  
上水に付候願・訴等同御省に申立、御差図請可申、勿論通例樋  
枘・井戸修復の義は、御訴可申上旨、去巳年中被 仰渡候に付、  
取計振左の通奉伺候

一、神田・玉川両上水大樋枘并地面内引取井戸共有来の低、普請・  
修覆仕候分は、已来直に土木司へ相願、御府へは別段御届不仕候  
一、右両上水樋枘并引取井戸、新規又は場所替等相願候節は、其区  
中・添年寄にて最寄の故障、往還其外差支有之相糺、奥書・加印  
の願書絵図相添、御府常務方へ奉願、土木司へ御廻し被成下候様  
仕度

右の通區々不相成様申合候、被仰渡に基き、簡易に御用弁可相  
成奉存候、御聞届相成候は、惣達仕度、此段奉伺候、以上

閏十月五日

世話掛 中年寄共

御 付 札

可為伺の通、地方中・添年寄共へも申通、區々不相成様可心  
得事

右御達申候、以上

閏十月五日

当番 廿壹番組

上地に相成候町屋敷の分、当正月より十月迄の地代上り高、町入用  
差引、一と地面毎に委細過不足取調、左の振合に認め、壹区宛取  
集、来る十二日迄に無相違可差出事

但町会所へ引渡候地所共、同様取調、尤右の分は朱書にて町会所  
へ引渡相成候旨、町銘の肩へ可相認事

庚午閏十月七日

一、上納日限は追て御沙汰の事

何町

何の誰上地

差配人 何の誰

午正月分地代

何程

内何程

町入用

差引

何程

上納敷  
不足敷 高

二月より十月迄右に准ず

右拾ヶ月分

何程

上納敷  
不足敷 高

右の通取調申上候、以上

庚午閏十月

何番組 中・添年 寄

何町

何の誰上地何坪

更地に付、上り高無之

午正月分町入用

何程

二月より十月分迄右に准す

右拾ヶ月分町入用

何程

右の通組々早々可申通旨、被仰渡奉畏候、仍如件

閏十月七日

小西喜右衛門

外耆人

右の通邸宅御掛にて被仰渡候間、御達申候、調書出来次第日限前にて  
も、成丈け取急差出し候様、御沙汰に御座候、以上

閏十月七日

当番世話掛

御付札

大工職其外世話方の者相立、銘々木札相渡取締為致候義、其外廉  
々当四月中相伺候処、木札相渡候期限相定可申上、且其上にて町  
御触被為 在候趣、同五月中御下知御座候処、此節右木札不残出  
来仕候間、御沙汰次第渡し方致度奉存候、右木札渡候節は、宅区  
限町用取扱所にて、耆人別に為相渡候様仕度

一、左官職へ附属致し、土こね・左官手伝并瓦師附属致し候瓦師手元

明治三年閏十月七日

手伝の義は、日雇稼の者にて、今日左官手伝に出候ても、翌日は  
外職へ被雇候義に付、木札相渡候義不都合に付、此分は不相渡候  
積り

一、木挽職世話方の者、是迄南・中・北三組にて九人に候処、人少  
にて手廻り兼候旨申立候に付、別紙名前の者拾四人世話方相増  
度旨申之候

右廉々奉伺候、以上

午九月

世話掛 中年寄共

御付札

書面三ヶ条共、可為伺の通事

右御伺書、御付札にて御渡相成、早々木札相渡行届候は、其段  
可相届旨、常務局より御沙汰に付、区内限り扱所にて、職人共へ  
世話方より木札為御渡行届候趣御書取、来る十八迄に無相違詰所  
へ御差出可被成候、以上

一、杣・木挽は五拾区訳けに無之、在来の組訳けに付、最寄にて町  
取扱所へ呼寄

一、杣職の分

日本橋最寄 山の手 深川

此分来る十一日、五番組扱所へ職人共呼寄、木札渡世世話方  
申之候間、兼て御承知可被成候

外神田 本所 浅草最寄

明治三年閏十月七日、十二日

此分来る十二日式番組扱所にて同断

一、木挽職の分

内神田 新材木町 四つ谷

此分来る十日三拾四番組扱所へ職人共呼寄、木札渡度旨、世話方の者兼て承知可被成候

外神田 本郷 小石川

此分来る十一日三拾式番組扱所へ同断

本所 深川

此分来る十二日四拾七番組扱所へ同断

八町堀<sup>(マ)</sup> 靈岸嶋 材木町

此分来る十三日八番組扱所にて同断

三拾間堀 麻布 三田

此分来る十四日拾式番組扱所にて同断

中橋 芝 麴町 牛込

此分来る十五日九番組扱所にて同断

一、家根職・石工は世話方手切にて、木札相渡候積り

右御達申候、以上

閏十月七日

当番世話掛

中年寄 何人  
添年寄 何人  
居付地主 何人

聞小間 何間

右は五区取集、合メ致し、来る十二日無相違御持寄可被成、此段御達申候、以上

閏十月十日

当番

右の通、達有之候間、今日中拙者方へ御遣し可被成候、以上

閏十月十一日

嶋田藤一

廿四番組の内

四谷塩町老丁目 居付地主 富田清兵衛

神取昌次郎

下田惣吉

小間七拾八間四分  
一、八人

山田藤七

森五兵衛

小林五郎兵衛

吉祥珍平

富山房三郎

右の通御座候、以上

庚午閏十月十二日

四谷塩町老丁目 地主代 原徳兵衛

両年寄中

中年寄 壱人  
添年寄 壱人



居付地主

聞小間 千五百拾七間式分

右の通取調、此段申上候、以上

庚午閏十月十二日

廿四番組 中・添 年寄 共

右の通廿五番組嶋田藤一殿方へ差出し候間、為心得の記置もの也

庚午閏十月十二日

金札御発行後、追々市・在流通盛大に相成候処、近來贋札流通の趣相聞、以の外の事候、右は屹度御所置の次第も可有之候へ共、差向真贋の分難相成者も有之、難決の趣にも相聞候に付、為御取締と左のヶ所へ改所取建候条、士商の差別なく同所へ持参、改受可申事

呉服町拾番地

芝宇田川町拾四番地

上野北大門町拾貳番地

右の通大蔵省より被相達候間、市・在不洩様可触知者也

庚午閏十月十四日

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

庚午閏十月十四日

三戸見太郎兵衛

東京在留外国人遊歩行程御布令書御渡、市・在組々早々通達可仕旨、被仰渡奉畏候、為後日仍て如件

庚午閏十月十五日

世話掛 嶋田藤一

明治三年閏十月十二日〜十七日

佐々木源助

左の通絵図面并別紙共、御渡被成候間、此段御達申候、以上

庚午閏十月十七日

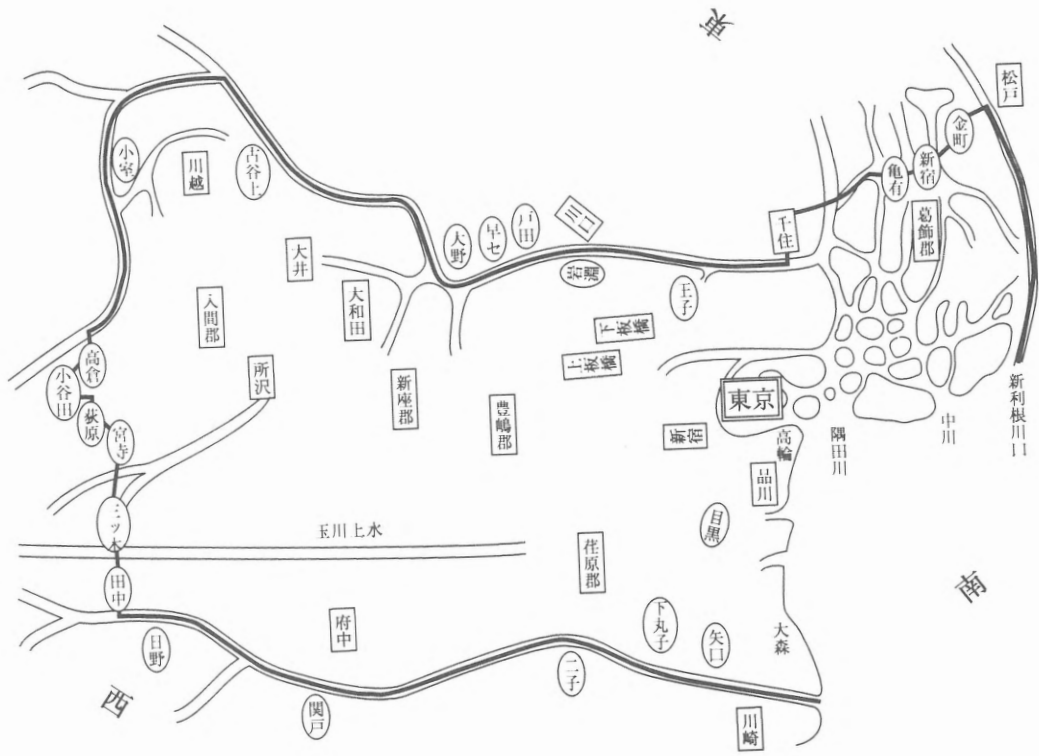
御用伺 当 番

\*絵図面は次頁

東京居留外国人遊歩の行程、別紙図面の通、新利根川又江戸川とも云口より北の方金町迄、夫より西の方水戸街道千住宿大橋迄、夫より隅田川を登り古谷上郷辺、小室村・高倉村・小矢田村・荻原村・宮本村・三木村・田中村諸村より朱引の通り日野渡場迄、夫より玉川口迄を以限とし、右区内は外国人共遊歩御差許の義に付、勝手に徘徊可致、彼我礼義も異り、殊に貴人も手軽るに旅行致候振合にて、在々の人民未た外国人の情態をも熟知せざる故、接対方におゐて不都合の筋は勿論、不作法等有之候ては不相済義に付、末々申伝へ、相互に心付、兼て御布令の趣心得違無之様可致事

一、外国人遊歩の節、若途中におゐて休息、又は薄暮に及び、止宿等相望み候は、所役人方へ案内致し、差支無之場所に候は、望の通取計可遣、旅籠代の義は相對を以請取可申事  
一、外国人出先におゐて、差懸り人足雇度旨申出候は、相当の賃錢受取、身元相分居候者差出候様可致事  
一、外国人共門塀等ある場所は勿論、招きにあらんすして人家へ猥に不立入候筈に候へ共、若庭構・園地等一見致し度旨申聞候は

明治三年閏十月十七日



、立入不苦場所へは案内可致、差支有之場所は相断可申事

一、社寺は庶人立入拝礼致し候場所迄立入候義は不苦、靈秘にいたし庶人猥に不為立入場所、其余廟所・墳墓又は境内ノ切の場所は相断可申、彼方懇願にて其主司に於ても強て差支無之候は、臨機の取計を以差許し候共不苦候事

一、東京開市場其外諸村におゐて

外国人と商売取引不相成筋に候へ共、通行の節、聊土産物等買得候義相望み候は、売渡候て不苦候、万一抜荷密商等の所業におよひ候は、屹度咎め可申付候条、若抜荷密商等見出し候歟、又は企候者有之候を承り込候は、速に東京府又は其支配の役所へ可訴出候、其品に寄、御褒美可被下候事

一、宗門の義、前々より御法度相守り、弥以堅く可相制、若異宗門の噂致し、又は申勸候者等有之候は、其段早速其支配役所へ可訴出事

一、鴉片烟草吸喫いたし候義は嚴禁に付、万一竊に相用候歟、又は所持致し候歟、或は外国人より密々買取候義有之候もの及見聞候は、前同様可訴出事

一、外国人に対し乱暴狼藉及候ては、礼義を失ひ候、恥辱而已ならず、第一

御威光にも相拘り、以の外の事に付、兼て御布令有之、今後右様心得違のもの無之筈に候へ共、町村におひては兼て手筈申合せ置、万一及狼藉候者有之候節は、所の者打寄搦取り、若手余り

候は、打果し候ても不苦候、若し取逃し候は、地元町村より時刻を不移、其支配の役所并東京府へ口上を以なりとも、手分け致し迅速に不届候、其余詮義の手懸り可相成義等及見聞候は、聊の事にても不隠置、是又早々可届出、其品に寄夫々御褒美可被下候事

附 乱暴受候外国人の国名・姓名等相分候丈け承り糺し可申

立、且又当人は手当行届候丈け介抱致し情々心付可遣、万一絶命におよひ候は、大切に守護致し差図相待ち可申事

右の条々急度可相守、若後日の引合を通れんがため、及見聞候義を押隠し、追て相顕れ候におゐては、当人は勿論、所役人迄も夫々嚴重の咎め可申付候条、心得違無之様可致、自今以後毎年壹度つ、其所役人より前書の趣小前の者へ為読聞、無遺失可相守もの也

庚午閏十月

太政官

右の通、常務方にて被仰聞候間、無洩御達可被成候、以上

閏十月十七日

当番世話掛

右御達申候、以上

明治三年閏十月十七日

御用伺 当番 式拾四番組

一、昨十五日午刻、英国軍艦リンドウ号附属のバッテリー船へ、同国人六人乗組生麦海へ罷越候处、大風にて右船覆没いたし候に付、早速地方より助舟等差出し、水夫三人は引揚、老人は死骸見出し候へ共、其余士官式人舟共行え不相知候に付、右死骸町村河

明治三年閏十月十七日（二十一日）

岸に流寄候は、見懸次第速に引上、片時も猶予不致、当府へ可

訴出候、若見遁し候におゐては嚴重の咎可申付候

右の趣、河岸付町村へ不洩様、早々可触知もの也

庚午閏十月十七日

今般東京一円明細測量被

仰付候に付、民部省より測量掛出張、道路は勿論、各官省・藩邸其

外諸邸宅・社寺・町地に至る迄測量致候条、此旨可相心得事

庚午閏十月

太政官

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触もの也

庚午閏十月十七日

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

庚午閏十月十七日

御用伺 廿四番組 当 番

四谷塩町壱丁目

\*近江屋\*

壱番地差配人

籠渡世

狩野清吉

\*鷹野屋\*

貳番・三番地主

彫物職

富田清兵衛

\*大坂屋\*

三番地差配人

洗張渡世

安村兵蔵

\*伊勢屋\*

貳番地差配人

更紗職

上原惣七

\*永田屋\*

四番地主

大工職

吉祥珍平

大工職

同 秀次郎

\*山田屋\*

五番地差配人

古道具渡世

砂賀庄三郎

\*丸屋\*

六番・七番差配人

塗師職

堰沢庄吉

\*岩田屋\*

八番地主

鼓調師

神取昌次郎

\*武蔵屋\*

右差配人

籠渡世

渡辺忠兵衛

\*山田屋\*

九番地主直支配

荒物渡世

山田藤七

\*相木屋\*

拾番地主直差配人

粉名干物渡世

下田惣吉

\*みの屋\*

拾壹番差配人

羅呉服渡世

堀安兵衛

\*三河屋\*

拾貳番地差配人

両替水油渡世

市川甚右衛門

\*青梅屋\*

拾三番地差配人

(釋)  
羅呉服渡世

高橋庄次郎

\*から屋\*

拾四番地主直差配

味噌問屋春米渡世

森 五兵衛

\*伊豆屋\*

拾五番地主直支配

大工職

小林五郎兵衛

\*山田屋\*

拾六番地差配人

荒物渡世

山田金兵衛

\*田中屋\*

拾七番地主直差配

春米渡世

大嶋市右衛門

\*上総屋\*

拾八番地差配人

番組人宿

吉田喜兵衛

\*大黒屋\*

拾九番地差配人

軍書講談寄渡世

宮 沢 嘉 七

\*永田屋\*

廿番地主直差配

大工職

吉 祥 珍 平

\*中村屋\*

廿壹番地差配人

鼈甲職

山田安右衛門

\*三河屋\*

廿貳番地差配人

肴売

伊藤清次郎

\*伊勢屋\*

廿叁番地主小左衛門

質渡世

勢州飯野郡中万村

住宅に付店支配人

富山房三郎

拾貳番地借

河内屋藤兵衛

拾貳番地借

漆原友次郎

\*大木屋\*

古着渡世

右御取調、此段申上候、以上

明治三年閏十月廿一日 右町地主代 原 徳 兵 衛 印

第三大区四七三区

御取締 御役人中様

閏十月十九日下問

第壹ヶ条

市中旅籠屋并素人宿、或は相對を以諸藩士并社家・寺院の向、其他浮浪の輩にて名籍曖昧たる者止宿為致候類有之候に付、去春旅籠屋は勿論、素人宿、又は相對を以止宿為致候向に至る迄、其都度相届可申旨、相達置候処、近來等閑に成行、加之間々は不容易ものを止宿、或は潜匿坏為致候者往々有之、一切取締向相付兼候に付、改て嚴重相触度、右は事實難被行訳も有之故の義に候哉、又は銘々御趣意を奉體せざる故の義に候哉、両様見込如何

第二ヶ条

橋本町・万年町・山崎町に住居候願人・出居衆等の義に付、年寄共申立の趣意も有之、当五月中取締申渡候次第も有之候へ共、今以盜

明治三年閏十月二十日〜二十一日

明治三年閏十月二十日〜二十三日

賊引合等不相絶、且右の外木賃宿と唱候不儘の者止宿・滞留為致、盗物取捌遣し候者も有之趣相聞、此上取締如何相立候て可然哉

第三ヶ条

髪結職の義は、寛永年中橋々見守申付、焼印札相渡有之候処、明曆大火後右見守中絶、万治年中又々願出、組合相定焼印札相渡、享保年中両町奉行最寄出火の節、駄付御用相勤度段願出候に付、改て焼印札相渡し、安永年中町年寄方最寄出火の節、書物持退の爲め、人数六拾人可罷出旨申渡、文化年中牢屋敷同断の節、人数三拾人可罷出旨申渡有之、然る処天保十三寅年三月組合中ヶ間と唱候義停止申渡、其後嘉永四亥年に至、組合再興申付、駄付の義、如前々の相心得候様、復々申渡、慶応三卯年十二月組合廃止申渡

御一新以来其佝混襲成来候処、武家地跡其外辻々にて髪結致居候者有之、旧来髪結渡世の者難渋致候杯、度々及歎願詮義の筋有之、訴状下置候へ共、例年七月中入牢人月代、橋杭又は臨時同様の義有之、仲間不定に候故、最寄の者而已被相遣、尤賃銀も相渡候義に候へ共、銘々不好義に付、致難渋候趣、薄業の者共慙然の事に候、差向此辺の仕法如何相立候は、可然哉

右夫々見込仕法可申立事

右は昨日御下問写差上申候、以上

閏十月廿日

廿壹番組

町々より月々差出候積金、例月日割通、閏月分御取集、御差出

可被成候

一、貧民御救願当日小札相渡、翌日美倉橋於町会所に米銭相渡し候処、兎角日送り、其上遅刻致し差支候間、以来翌日昼正四つ時罷出候様可致旨、御掛御役人中被仰聞候、尤頂戴人着次第直様相渡候積、呉々無遅々御差出可被成候、以上

閏十月廿日

町会所 年 番

来未年二月十五日より日数五十日の間、王子稻荷臨時祭札執行有之、左のヶ所へ建札致度旨、神主大岡家等より浦和県添管を以願出、聞置相成候に付、其場所地主共へ示談の上、相建可申旨、社寺御掛より被 仰渡候間、左の町々へ御達置可被成候

午閏十月

四谷大木戸

市谷御門外

飯田橋中坂下

右御達申候、以上

閏十月廿一日

廿壹番組

家作税銀閏十月分迄は、小熊包にて可相納、十一月分は小熊包に不及可相納、尤成丈け大札にて相納候様、消防懸より御沙汰に付、御達申候、以上

午閏十月廿三日

当 番 世話掛

市・在世話掛 年寄共

今般氷川社へ

行幸に付被仰出候に付ては、人足通雇上げ候様の積に付、職業の者

へ入札申付候間、別紙の通耆人当相当の賃銭取調、尤格外安直段申立、於途中に差支の義出来候ては不相濟事候に付、不算の入札不致様申論、明廿四日中望のものは駅通司出張、馬場先御門内元大蔵省へ罷出候様、其筋のものへ至急通達の事

庚午十月廿三日

覚

三日の間雇上の積  
一、凡人足五百人 但人足遣増減可有之事

但人足耆人に付

一日 何程

右の通入札の事

六組飛脚問屋へ今晚中無洩御達可被成候

市・在 年寄共

蚕紙糸の義、旧幕以来道路・橋梁修覆入費の為、税銀取立候処、  
蚕紙室部紙の義は別紙御布告有之候規則書の通改正致蚕糸の義は、不日規則確定可致筈に付ては、自今海運橋通商司收税并改の義は相廃し、  
来未年より規則書の通り施行可致筈に候間、大蔵省より達有之候間、右御布告規則書五拾五部宛相渡し候に付、耆区耆部宛配達、区内不洩様可触知事

明治三年閏十月二十三日～十一月九日

庚午閏十月廿三日

来る廿九日氷川社

行幸、十一月朔日

御参拝、同二日

還御に付、火の元別て入念候様、市・在不洩様可触知もの也

庚午閏十月廿四日

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

閏十月廿四日

御用伺 当 番

来廿九日氷川社

行幸 御出輦に付、同日会議休会相成候間、此旨町々可申事

閏十月廿四日

会議掛

今般東京一円測量被仰出候に付ては、測量掛出張、築地模寄(マ)より相始め、追々所々明細測量致候間、往還道筋目印・旗建、測量致居候場所へ可成丈、右見通しの妨不相成様、片寄通行可致旨、町々へ不洩様触達可有之候、此段相達し候也

庚午十一月

民部省

右の通被相達候間、市・在不洩様可触知もの也

午十一月九日

東京府

右御達申候、以上

明治三年十一月九日～十六日

午十一月九日

廿式番組 当 番

四拾七番組

深川久永町壹丁目

同所同町貳丁目

合併

深川久永町

右の通相唱申度段、常務方へ奉願上候処、願の通被 仰付候間、此段御達申候、以上

庚午十一月

右組 年 寄

市・在 世話掛 中年 寄

当府の印、是迄朱丸の内に東の字用來候処、以來別紙雛形の通、細輪の内白地に東の字に相改候間、為心得と相達候事

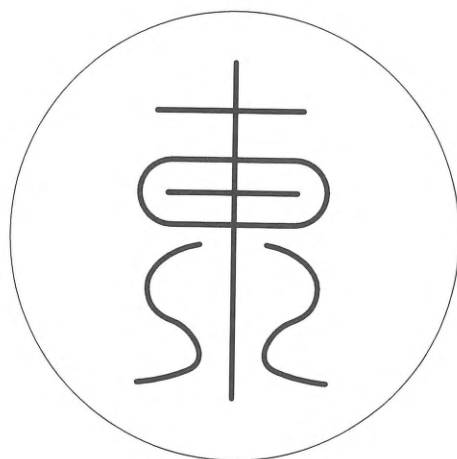
庚午十一月

(雛形は下段)

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

庚午十一月十三日

片岡二左衛門



御相談書

一、町々自身番屋の義、相潰し又は在之低立置候町内も有之候へは、当分是は其低にて当区之最寄々々三四ヶ町つゝ、組合月番を立、月番へ集会・町用都て無隔意談用打合せ為届、心切を厚く、心懸け候様為致候事

一、町用掛給料盛衰の場所不拘、老人は老人の勤方致し、余業に携事にも致間敷、左候へ共、平等に致遣し方に可有之歟、此度町用掛の内、小町は小間寡く、町々限の小間割出銀相成候へは、相勤兼候場合、一区の内は一系列の義に付、脇町の住居に候共、其町内の用向に不拘、他町の用向も関係致候様ならでは、町年寄衆局々



へ御呼出しの節、御用并相成間敷哉、盛町にて衰候町内のものに  
給料の助成の様被心得候ては、町用差支可申哉、是等の意味深長  
篤と御勘考、此念は思棄可然哉

庚午十一月十六日

町用懸人数  
三拾八人  
一、金百八拾四両也

右を

下 千五百拾七間式分に割

壹小間に付 銀七匁式分八厘

壹ヶ月

け 三拾五人は

壹人に付 金五両つ、

右の内

札 富久町・四谷仲町・元鯨北町

右三ヶ町の義は、小町にても外町へ合併相成兼候訳に至ら  
す、故に壹人つ、掛りしもの差置候事

一、金三両つ、

市・在 組々 中・添年寄共

物産仕法局の偽名を街、下見分等致し、又は官員へ手続有之様言触  
し、謝礼金等貪り取へく奸計致候者、所々有之哉の趣相聞、以の外

明治三年十一月十六日、二十日

の事に候間、右様の者有之候は、不隠置早々其筋へ可申出候、一  
鉢願人共に於ても、同局規則の趣意柄不心得より被欺候杯にも相成  
候間、以来願出候者は、世話人・周旋人の不清口入願人・証人の  
中、直に同局へ罷出、規則の条々相心得候上、正路に可願出候事  
右の趣市・在不洩様可触知者也

庚午十一月十七日

今般消防改革に付ては、追々相達候義も可有之候へ共、差向火事の  
節、無用者火近の場所へ立集候ては、消防の妨に相成候而已不成、  
類焼人共等家具持退の差障相成候に付、今後近辺の場所は勿論、近  
傍往還等無故立廻り申間敷候、若相背候者於有之には、火事場出張  
の役員臨機の致所置候義も可有之条、心得違無之様、小前末々に至  
る迄、急度可申聞候

右の趣市・在不洩様可触知者也

庚午十一月十七日

御用伺当番

来る廿四日

新嘗祭に付、来る廿三日晚より廿五日朝迄、町年寄并人足共申  
合、町内裏々迄時々見廻り、火の元厚心付可申事

一、廿三日晚より廿五日朝迄、大火焚候渡世の者相休可申事

一、諸遊郭は勿論、市・在におゐても鳴物一切相止め、別て相慎可  
申事

明治三十三年十一月二十日〜二十四日

右の趣市・在不洩様可相触者也

庚午十一月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午十一月廿日

馬込彦一郎

張出し

来る廿三日鎮魂祭、来廿四日

新嘗祭被為行候に付、来る廿一日晩より廿五日朝に至り

御神事候条、軽重の服者は参朝可憚事

一、火の元別て相慎可申并梵鐘一切停止の事

但出火の節は、格別の事

庚午十一月

太政官

右の通被 仰出候間、都て去巳十一月新嘗祭の節、相触候通相心得、火の元別て入念候様、市・在不洩様可触知者也

庚午十一月廿日

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午十一月廿日

馬込彦一郎

組々中・添年寄共

来る廿四日・廿五日兩日休暇の事

但廿六日休暇には不相成事

右の通市・在不洩様可申通者也

十一月廿日

右御達申候、以上

庚午十一月廿日

廿三番組 当番

転盜等にて咎罪の上、御引渡相成候者、御白洲にて被仰渡御証文濟、直に囚獄へ引取人并町役人差添可相廻旨、兼て御沙汰の処、此程引取人共囚獄へ廻り、刻限及遲滞御差支に付、以来被仰渡御証文濟、即刻引取人、町役人差添囚獄へ可相廻旨、急速申通候様御沙汰に付、町用掛の者へ不洩様御申渡可被成候、以上

但外御用等兼罷出、御用濟相廻候故歟遲滞に付、右様の義無之様可申通旨被 仰聞候

庚午十一月廿二日

当番世話掛

密達覚

十一月廿三日夜五つ時頃、神田於鍋町に大学南校御雇教師英人ダラス、リンゲ兩人へ暗にに刃をを以手疵を為負候に付、刃こほれ等も可有之に付、右刀研或は売払方等も可申聞も難計間、左の商人共へ隱密に至急相達し置、若聊にても手懸り或は心障の義も有之候は、其者宿所・姓名等無何心承置、時刻を不遷、当府へ訴出候様可致、尤町年寄・町用掛差添に不及候事

但弥手懸にも相成候へは、其者へは格別に御褒美被下候事に付、万一懇親等の間柄を以隱置、後日於頭には同様の罪を以、嚴重の咎可申付事

一、研師 一、刀屋 一、小道具屋 一、質屋

\*札け下\* 疵為負候侍老人、俗にねんねこ半天と唱候八丈嶋長半天黄色に  
相見へ候由、老人は同黒嶋の様に相見へ候由  
\*羽織\*  
\*々々々\*

右の通、唯今常務方へ被招呼、至急行届候様申通、来月二日一と先  
否老区限返答可差出、尤追て右様の義可有之も難計、返答後も厚相  
心得、手懸りも有之候は、密々即刻申立候様被 仰出候間、御持  
場五区早々御通達可被成候、以上

庚午十一月廿四日

長沢次郎太郎

星野又右衛門

去る廿三日夜五つ時頃、神田鍋町於往還に、外国人兩人へ為疵負候  
者有之、右に付此程相達候趣、支配裏々に至迄迄く為読聞、承知印  
為致可申事

但右印形為致候節、改候者心得、右疵付候を見請候歟、或は人の  
咄にても手続に相成候義を承り候者有之候は、其手続篤と承  
り置、其ものへも右廉を以、御賞可有之趣申聞置、早々申出候  
様、区内限り厚く相心得候様可致候事

庚午十一月廿六日

断獄司

右御達申候、以上

午十一月廿六日

世話掛 当 番

今般差配人相廃止、地面取締の義、地主掛隔又は数ヶ所所持の  
ものは地守差置不苦旨被

明治三年十一月二十四日〜二十七日

仰渡、然る処此地守の義、地面内相当のもの無之候は、其町  
内住居の者に限り、実直の者相撰申付候様為取計、他町住居の者  
は、たとへ隣町或は向側に候共、一切不承届積

一、地主共の内、家業柄に寄、地守相勤兼候者は、居付地主に候共、  
地守相付け不苦候

右の通区々不相成様、御申合御取計可被成候、以上

一、上地の分地守人撰、来る晦日迄に御差出し可被成候、以上

午十一月廿六日

当 番 世話掛

先達て会議の節、御相談申上候町火消人足怪我人御手当向の義、消  
防御掛へ伺書差出置候処、右は療治中に何々の廉、此掛高何程有之  
と申事委細取調申立候様、河原様御談御座候間、過日神田山元町出  
火、其外近頃出火場にて怪我致候者有之御組合は、左の廉々大組合  
にて御取調、来月二日迄拙者共扱所へ御遣可被成候、以上

午十一月廿六日

町火消式番組 ろ 組 世話 番

一、怪我人医師へ相掛候駕籠賃、何れの場所より何れの辺迄、老度  
何程

一、医師薬代其外何程

一、療治中暮方人用何程

右の外にも当人引込中、入費御取調可被成候

市中 世話掛 中年寄共

明治三年十一月二十七日、二十八日

是迄当府表門内平民傘・下駄憚候処、以来不及其儀事

右の趣寄々可申通事

午十一月廿七日

村松 為 溪

右御達申候、以上

午十一月廿七日

当番掛 式拾番組

去る廿三日夜五つ時頃、神田鍋町往還におゐて、外国人へ為疵負候者有之候に付ては、及見聞候は勿論、右に付手掛等の義及承候は、即刻可申立、兼て御布告の通り御褒美被下置候間、聊の義にて可申立旨、承知仕候、依之御請印仕候、以上

右御達申候、以上

庚午十一月廿七日

廿式番組 当 番

市・在 中年 寄

去る廿三日夜、当人并塾生・内弟子共外出人名并行先・帰宅刻限一々取調、至急指出可申旨、市・在医師・学問教授・剣術指南等致罷在塾生・内弟子指置候向へ、一区限り不洩様触示し、調書取束ね至急可差出事

庚午十一月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

十一月廿七日

長沢次郎太郎

外式人

右の通、常務局にて被 仰渡、区内并最寄武士地共無洩様取調、来る晦日迄に無間違可差出、尤諸藩等にては、其藩へ申立候杯相答候向は、其段書取、別帳にて差出し候様被 仰聞候、此段御達申候、以上

午十一月廿七日

当 番 世 話 掛

右御達申候、以上

庚午十一月廿七日

当 番 廿式番組

所々へ

市・在 中・添 年 寄

行幸の節、御道筋并外国公使等参朝の砌、道筋心得の義、兼て別紙の通相心得居、不取締の義無之様可致、勿論其余臨機の義は、其節々可申達候  
右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午十一月廿八日

山田八郎右衛門

行幸の節、御道筋心得方

一、御道筋往還掃除入念申付、風立候は、時々水為打可申事

但床見世・葭簀張等差障不相成分は其俣差置不苦、尤商売為

休可申事

一、町屋二階の戸ノ可申事

但目張に不及

一、御通輦の節、男は土間に平伏可致、女・小供は床上に罷在平伏不苦候事

一、同断夜分に候は、町家軒下へ挑灯可差出事

一、並手桶表の間数に應し可差出事

一、御道筋湯屋・豆腐屋・菓子屋・味噌屋・蕎麦屋・饅飩屋・鍛冶屋の類、都て大火焚候ものは、火の元別て入念可申事

一、横小路板囲等不及、差掛縄張にて人留可致事

一、御道筋町村役人共着服の儀は、其節に可相達事

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午十一月廿八日

山田八郎右衛門

外国公使等参

朝の節、道筋心得方

一、道筋往還掃除入念可申事

一、往来混雜為不致、武家は通行差留候事

一、右に付、辻固兵隊罷出候間、中・添年寄、町年寄共羽織袴着用、持場へ罷出居、外国人へ対し不作法無之様、厚心付可申候事

一、通行夜分に候は、町家軒毎へ挑灯可差出事

右の通、被仰渡奉畏候、仍如件

庚午十一月廿八日

山田八郎右衛門

右御達申候、以上

明治三年十一月二十八日〜十二月四日

明治三年十一月廿八日 廿四番組 御用伺 当 番

右の通、御達申候間、早々御順達可被下候、以上

午十一月廿八日

塩巻 町用懸

狩野清吉殿

上原惣七殿

安村兵藏殿

砂賀庄三郎殿

堰澤庄吉殿

渡辺忠兵衛殿

山田藤七殿

下田惣吉殿

市川甚右衛門殿

堀安兵衛殿

高橋庄次郎殿

小林五郎兵衛殿

吉田喜兵衛殿

宮澤嘉七殿

山口安右衛門殿

吉祥珍平殿

佐藤清次郎殿

富田氏

神取氏

富山氏

去月十二日被 仰渡候条々、惣地主連判受印帳、五区御当番にて御取集め、来る七日無間違拙者共詰所へ御差出し可被成候、此段御達申候、以上

午十二月四日

世話掛 当 番

町会所附地所地守の義、先達て御達申候通、本府上地の振合にて人撰、名前書来る十日迄無間違御差出し可被成候、以上

午十二月四日

町会所 年 番

斗南藩中貨幣偽造の者不少、今般御取締相成候へ共、偽造の徒多人数及脱走候に付ては、此後何れの地へ潜匿、再偽造相企候も難計、

明治三年十二月四日、十二日

国の大禁を犯し不届に付、向後贖金・贖札等を企候者、及見聞に事  
実於無相違は、速に召捕、兼て御布告の通偽造宝貨律を照準し可致  
所置、万一手向の者は打取候ても不苦候条、各地方官に於て此旨相  
心得、厳密に取締可致事

庚午十一月

太政官

右の通被 仰出候間、市・在、中・添年寄限為心得相違候事

庚午十二月四日

東京府

此頃年齢五拾叁才位并廿八九才位の沙僧兩人、信州善光寺大勸進  
使の者旨を以、市・在の者へ申込候には、此度善光寺改年に付、過  
去帳名前諸国群集の数万の内、誰夫義何番の当り圖に付ては、金銀  
備物等多分差出候様、種々の手段を以銜取候もの有之候間、此段持  
区中立廻り可申も難計に付、其町内の者へ申通し置、若立<sup>(ママ)</sup>り候は  
、鉢能饗<sup>(ママ)</sup>挨、速に最寄屯所へ可届出様急度可申含置もの也

庚午十二月十二日

第三大区 出張所

市・在 中・添年寄

兵部省管轄兵隊の軍服・帽・沓等は、仮令難用品たり共、入質又は  
売払候義は不相成筈の処、中には心得違の者有之、質入或は売払候  
ものも有之哉の趣相聞候間、以来別紙雛形類の品、決て相用申間  
敷、万一相背買取又は預り置候におゐては、品物取上げ、売主・買  
主共嚴重の可及沙汰条、右渡世の者は勿論、其外の共都て心得違無<sup>(ママ)</sup>

之様可致候

右の趣市・在不洩様可触知者也

庚午十二月

(表紙)

第三大隊

兵士洋服雛形



↑兵士洋服裏へ押処の印

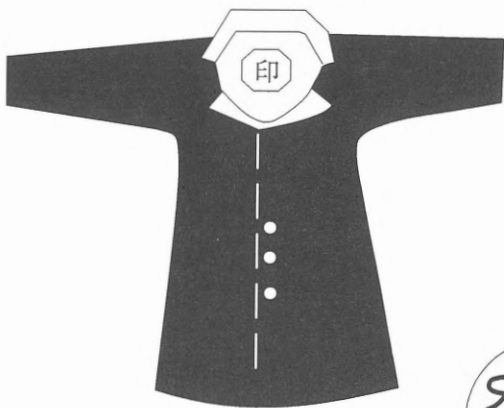
兵士沓へ押処の印↓

但焼印



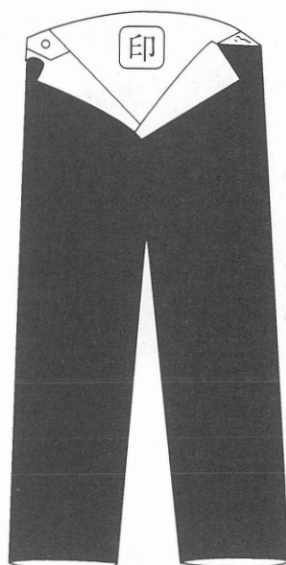
マンテル

表紺大羅紗  
裏白モメン



明治三年十二月十一日

スホン  
表シモフリ大ラシヤ  
裏白モメン



チヨツキ  
表黒羅紗  
裏白木綿



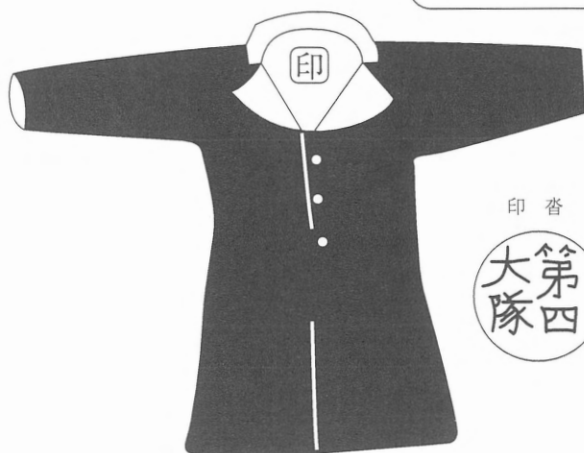
(表紙)

第四大隊陣服雛形

陣服印

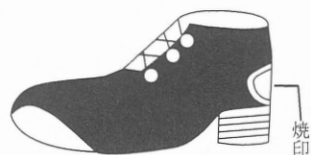
第四大隊

マンテル  
表紺大羅紗  
裏白木綿



沓印

第四大隊



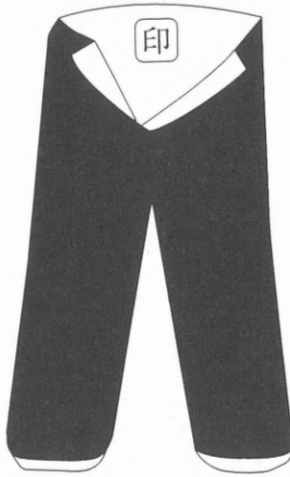
沓

焼印

明治三年十二月十日、十一日

チヨツキ  
表紺大羅紗  
裏白木綿

ズボン  
表霜降大羅紗  
裏白木綿



半沓

右の図面の品々、質物に預り、又は売買致候者は、嚴重の御沙汰可有之旨、篤と御申聞承知仕候、依之御請書差出申候処、仍如件

庚午十二月十一日 四谷塩町老丁目

廿壹番地主 富山小左衛門 印

五番借地 山田屋 山田庄三郎 印

八番借店 建場 石川藤次郎 印

老番借地 弓師 福沢吉五郎 印

同 尾張屋 木村新兵衛 印

拾貳番借地 大木屋 漆原友次郎 印

同 河内屋 藤原藤兵衛 印

市谷七軒町

貳番地主 酒屋 岡村善五郎 印

臨時取調掛へ

一、往来町々地所に付、無代人足差出し、又は冥加筋或は上納金等致居候分

一、町人共渡世筋に付、同断

右組々取調、早々可差出候事

右簾々御取調、来る十五日詰所へ御差出可被成候、此段御達申候、以上

庚午十二月十日

世話掛 当 番

右御達申候、以上



十二月十日

廿四番組

從來天社神道と唱、土御門家免許を受候者共、両刀を帶、絵符を  
建、宿駅通行致候由、甚無謂事に付、自今右等の所業等は差止候  
条、嚴重可申達、猶今後門人免許一切被禁候旨、今般土御門和丸へ  
御沙汰相成候条、府藩県<sup>(マツ)</sup>おいても、此旨相心得管内取締可致事

庚午十一月

太政官

右の通市・在不洩様、可触知者也

十二月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午十二月八日

衣笠三之助

当庚午八月中蚕種製造并税則の義に付、布告書并規則共相達置候  
処、尚今般右規則附屬書相達候間、前規則と一同遵守可致候事

庚午十一月

太政官

右の通被仰渡候間、蚕種規則附録書五拾五部相渡候條、一区壹部つ  
、配達、市・在不洩様可触知者也

庚午十二月

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午十二月八日

保坂政右衛門

右御達申候、以上

午十二月八日

廿三番組

明治三年十二月八日〜十一日

浅草寺地中 清 吉

午廿三才

一、丈け高き方

一、色浅黒く

一、顔丸く

一、腮こけ候方

一、眼大きく

但眼の下に壹寸貳分位の太刀疵有之

一、髪毛多く

一、鼻眉毛共常髭

但眉毛片々薄く、背中に武者の彫物有之

右人相書に相当候者、及見聞候歟、又は立廻り候は、当人へ不響  
様致置、速に可申上旨、且又当人直に立去り候様子に有之候は、  
跡付致し候様、私共壹人別に被仰聞奉畏候、依之精々入念心附居、  
右様のもの立廻り候は、時刻不移可申上候、依之御請書差上申  
候、以上

明治三年十二月十一日

四谷塩町壹丁目

七番地借店 髪結職 中村長次郎<sup>印</sup>

同 町

九番借地 吉田喜兵衛<sup>印</sup>

明治三年十二月十一日～十四日

同 町

拾六番借地 清水万蔵<sup>印</sup>

町用掛衆中

北海道諸産物入津の節は、送り状を以其渡世のものより、開拓使出張所へ速に可届出、若自俣に水揚致し、抜荷其外不正の取計いたすにおゐては、取札の上、急度咎め可申付事

一、水揚荷物の義は、直組取計相済品たり共、夜中取扱致間敷事  
右の趣市・在不洩様可触示もの也

庚午十二月

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午十二月十二日

蒲生喜一郎

相州城ヶ嶋於て、廻船目当の爲め、是迄篝火相用來候処、今般西洋形燈明台建築、当八月十三日より照火、尤光白色に候条、府藩県におゐて此旨相心得、管内船持の者へ可相達事

庚午十二月

太政官

右の通市・在不洩様可触示者也

庚午十二月十二日

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

十二月十二日

村木芳太郎

落着其外刻限御呼出しの節、遅刻限候者有之、御差支相成候間、右鉢の義無之様、町年寄・町用掛へ急度相達置候様、断獄局より御談しに付、区限り行届候様御取計可被成候、此段御達申候、以上

午十二月十二日

当番 世話掛

右御達申候、以上

庚午十二月十二日

御用伺 当番 廿式番組

右御達申候、表裏店々へ御通達可被成候、以上

十二月十三日

町用掛り

市・在中・添年寄共

今般華族の輩、地方官貫属被 仰付候旨、被 仰出候間、其方共迄為心得と相達候事

庚午十二月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午十二月十四日

竹口庄左衛門

華族<sup>元武</sup>の輩、自今東京住居被 仰付候、尤知事として地方官<sup>おいたる</sup>赴<sup>つゐ</sup>任の向、願の上、妻子召連候義は不苦候事

但無扨事<sup>マヤ</sup>存有之、即今移住難相成向は可願出候事

庚午十一月

太政官

右の通被仰出候間、区々中・添年寄共迄為心得と相達候事

午十二月

右の通被仰出奉畏候、仍如件

庚午十二月十四日

森幸右衛門

百姓・町人共襦高袴・割羽織を着し、長脇差を帶、士列に紛敷風鉢にて致通行候義不相成候事

庚午十二月

太政官

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触者也

庚午十二月

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午十二月十七日

大塚太郎右衛門

市・在 中年寄

今般百姓・町人共襦高袴・割羽織を着し、長脇差を帶し、士列に紛敷風鉢にて通行不相成旨、被 仰出候処、市・在、中・添年寄、町・村年寄等襦高袴・割羽織着用候義、従前相達置候通相心得可申、尤長脇差の義は不相成候、此旨相達候事

庚午十二月

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午十二月十七日

大塚太郎右衛門

市・在 世話掛 年寄 共

近來所々橋台際へ、猥に葭簀張又は床見世等補理、或は橋上にて出

明治三年十二月十四日、十九日

商ひ致し居候者も有之、往還の妨に相成候間、当月を限り、以來決して為差出申間敷候

但是迄橋台際に補理有之葭簀張・床見世等、是又当月限取払候上可届出候

右の趣組々不洩様早々可申通

庚午十二月

右の通被仰渡奉畏候、以上

午十二月十七日

馬込彦一郎

外売人

区々 中・添年 寄

今般於宮繕司、家根職・釘鉄物渡世・鋸・畳・経師等の職々へ請負入札申付候間、有志の者は辰の口宮繕司へ罷出、注文品書一見の上、精蜜直段取調、来る廿三日朝迄、同司へ入札差出候様可相達候事

庚午十二月十九日

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

十二月十九日

鈴木 一郎

清 吉殿	惣 七殿	兵 蔵殿	庄三郎殿
庄 吉殿	忠兵衛殿	藤 七殿	惣 吉殿
甚右衛門殿	安兵衛殿	庄次郎殿	五郎兵衛殿

明治三年十二月十九日、二十一日

嘉 七殿 珍 平殿 清次郎殿 安右衛門殿

富田氏 神取氏 富山氏

七軒町

茶屋氏 溜屋氏 荻庄氏

弥兵衛殿

茶の実入用に付、上種所持のものは、納直段相認め、御買上げ下相願度者は、来廿五日迄に物産局へ入札可差出候

庚午十二月

右の通、物産局御掛より御談に付、早々御通達可被成候、以上

庚午十二月廿日

当番 世話掛

御用多に付、明廿一日休暇無之候

廿五日御祭典に付、罷出に不出、<sup>及\*</sup>廿六日御用仕舞に付、休暇無之候<sup>及\*</sup>

右の通、常務局にて御口達に付、御達申候、以上

庚午十二月廿日

当番 世話掛

来廿五日於神祇官に

孝明天皇御祭典被 執行

御拝被為在候条、廿四日酉の刻より

御祭典祭済迄

御神事に候事

但重軽服者并僧尼の輩参

朝可憚事

右の通被

仰出候間、火の元別て入念候様、市・在不洩様可触知もの也

庚午十二月廿日

右の通被 仰渡奉畏候、以上

十二月廿日

村木芳太郎

外国人を相雇居候者有之候は、雇入町銘・姓名并雇候外国の名<sup>(姓)</sup>前・給料・雇期限・歳附等委細相認め、来廿三日無相違可差出旨、常務局にて被仰渡候間、同日詰所へ御差出し可被成候、尤無之分は、其段同日御返答可被遣候、以上

十二月廿日

当番 世話掛

市・在 世話掛 年寄 共

月迫に相成、餅搗其外にて市・在一層の焚火取扱候、就ては火の元別て入念候様可致事

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午十二月廿一日

星野又右衛門

町会所当廿六日御用仕舞に付、諸願共成丈け同日迄に御差出し可被成候、且御救願の義も、是又同日迄に御差出し御座候様、各々様御

心得迄御達申候、以上

十二月廿二日

町会所 年 番

市・在 中年寄

一、市中五拾区・地方五区共見計、区堺へ従是<sup>東西</sup>南北何番組と申す木札打付、或は小傍示杭札可建事

一、区々附属地堺へ、前書同様何番組附属地と申木札打付、或は小傍示杭可建事

但木札・小傍示杭附属地の分は、代金下け渡べく事

右の通、来未正月廿日限取計可申事

庚午十二月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午十二月廿三日

世話掛 片岡二左衛門

右の通、区堺見分け宜敷様、尤手輕に且明地・附属地等に建候傍杭等も垂木位の品にて、手輕に取建候様可致旨、常務方より御沙汰に付、行違無之様御取計可被成候、以上

但武家地・板堀・明地等の分、行違無之様、御取計可被成候

町方より訴物有之節、是迄組々番号認め無之处、今後訴書面へ番号相認、差出し候様可致候

右の通組々不洩様、可触示者也

庚午十二月廿四日

明治三年十二月二十二日〜二十五日

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

庚午十二月廿四日

当 番 世話掛

右の通、常務局にて被 仰渡候間、此段御達申候、以上

午十二月廿四日

世話掛 当 番

近來所々橋台際へ猥に葭簀張・床見世等差出候分并橋上共引払の義、去る十七日被 仰渡候に付、左の通

一、橋上商人の分

札付御

一、橋台前後左右五間の内へ、猥に相立候床見世・葭簀張の分

右は来る廿九日限、商ひ致候義差留め、取払済御届の義は、来月八日組々限り御届書可差出候

右は橋台前後の区内、取計方緩急有之候ては、不平申唱候間、不都合の義無之様、惣達可仕奉存候、此段奉伺候、以上

午十二月廿四日

市・在 世話掛 中年寄

御 付 札  
書面可為何の通事  
印

右の通、改正掛へ伺相済候間、此段御達し申候、以上

午十二月廿四日

世話掛 当 番

右御達申候、以上

午十二月廿五日

廿三番組 当 番

明治三年十二月二十四日、二十五日

今般売薬取締の義、大学東校所轄<sup>かつ</sup>に被 仰付、別冊の通、規則相定候条、府藩県におゐて管内売薬の者共へ相達し、取締可致、且從來の売薬の法書并功能・用法・定価等詳細相記し、東校へ可差出事

庚午十二月

太 政 官

売薬取締規則

一、売薬類自今大学東校に於て、名実功否<sup>めいじつこうひけんせ</sup>検査<sup>あきらめ</sup>の上、免状を与へ、  
売<sup>い</sup>薬<sup>い</sup>を許すべき事

一、從來売薬に勅許・御免等の字を用候義、自今一切禁止の事

一、新規売薬発行致度者は、薬方・功能・定価<sup>目方何程に付て</sup>明細に相記、  
東校へ願出、免状を受けべき事

一、拔群有益の薬方、又は製薬類新に發明する輩は、七ヶ年の間専  
業を許し、發明の賞とす、七ヶ年の後は、其薬方を明細に記、諸  
国一般に布告し、広く發行するを許べき事

一、諸売薬の品、原価巨細に相記、東校に於て相当の定価を極め、  
免状へ記相渡候条、定価の外聊たり共、増価の義堅禁止の事

庚午十二月

大 学

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触知者也

庚午十二月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午十二月廿五日

高麗佐平太

大工始諸職人賃銀取締方の義に付ては、前々より度々触達の趣も有

之處、中には稼方不直の者も有之、時に臨み不相当の請負致し、又  
は相当<sup>対</sup>を以、過当の賃銀申受候者も有之趣相聞、右は畢竟職々取締  
方不行届故の義に付、向後府下一般公平の賃銀相定、稼方可致、右  
に付、為取締と毎職世話方相立、職方のものへは夫々鑑札相渡し候  
筈に候、此上万一過当の賃銀等請取候義於有之には、急度嚴重の沙  
汰可及、勿論自今無札のものは決て相雇申間敷候事  
右の通市・在不洩様可触知者也

庚午十二月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

庚午十二月廿四日

大場宗十郎

出火有之候砌は、以来始末書絵図<sup>(行カ)</sup>相添、常務局へも御届け可差出  
旨、於御同所に被 仰渡候間、此段御達申候、早々行届候様御取計  
可被成候、以上

庚午十二月廿五日

当 番 世話掛

差上御請書の事

一、今日雲井龍雄其外の者共、御仕置相成候、就ては若同意の者共  
当模寄<sup>マドマ</sup>に有之候て、多人数相集候歟、又は如何敷風聞等及承候は  
、不取敢早々可申越旨、被 仰渡承知奉畏候、依之御請書差上  
申候処、仍如件

明治三年十二月廿五日

廿四番組扱役所詰 原 徳 兵 衛 印

西川大属様  
森権大属様  
牧野権少属様  
小川権少属様

此程火事沙汰多く有之候に付、持区内町人共へ、火の元別て入念候様、忝人別に可申渡旨、今日拙者共へ御達に付、早々末々迄不洩様可申通事

庚午十二月廿五日

第三大区 出張所

正月四日御用始に付、同日麻上下にて御用伺当番の者罷出可申、其後は同八日より日々御用伺に罷出候様、改正御掛にて被 仰渡候、此段御達申候、以上

午十二月廿六日

世話掛 当 番

右年始為御礼と、来正月七日当府へ可罷出事

明治三年十二月二十五日〜二十六日

市・在 中 年 寄  
添 年 寄  
石川庄次郎  
町 年 寄  
同 助 勤  
村 年 寄

但辰刻揃の事

一、一同へ御祝酒被下候事

一、姓名書忝区限り<sup>(マ)</sup>粘入紙・横帳に認め、当朝可差出事

但病気差合等にて不参の分は、其趣半紙帳に相記、別段に可

差出事

一、重服の者は可憚事

但此分取調正月四日可書出事

右の通可相心得事

庚午十二月廿六日

常務局  
郡政局

右の通被仰渡奉畏候、仍如件

午十二月廿六日

星野又右衛門  
外忝人

右重服の者は、名前半紙・立帳にて、正月四日正四時御差出し可被成候、<sup>(マ)</sup>粘入紙へ認め候名前書、雛形の通御認め、同月七日辰刻、区限りの分五拾区取纏め差上候事、尤当病其外差支、御礼不罷出者其趣半紙帳に認め、<sup>(マ)</sup>粘入紙の名前は相除き、忝区限り、当朝遅刻無之様御差出し可被成候、右御達申候、以上

午十二月廿六日

当 番 世話掛

用紙粘入紙<sup>(マ)</sup>

何番組

中年寄 何の誰

明治三年十二月二十六日

添年寄 何の誰

町年寄 何町 何の誰

官員方御手札寸法、豎三寸九分、巾壹寸四分御定相成候間、御同前  
手札を右寸法に相心得可然旨、改正御懸より御沙汰御座候、此段御  
達申候、以上

但町年寄も同様の事

午十二月廿六日

当番 世話掛

右御達申候、以上

庚午十二月廿六日

廿四番組 当番

口達の写

世話掛 中年寄

今般於駅通司、書狀郵便所御取建、夫々御発行相成候に付、当府下

虎御門外

両国橋

筋違御門外

浅草観音前

牛込御門外

赤坂御門外

京橋

芝神明前

赤羽根橋

四谷御門外

永代橋

総て拾壹ヶ所へ書狀集め函、及各地賃錢・時間表へも指出し、書狀  
取扱方は、都て駅通司進退に候へ共、右書狀切手売捌方の義は、町

々町年寄にて取扱可申、手数の義は、百文に付錢四文の割合を以、  
御下け相成候条、月々切手売上げ高取調当府へ差出し候様可致、尤  
取扱方委細の義は、追々可相達候

右の趣、新吉原・新嶋原遊女屋渡世のものを除の外、町々町年寄中  
へ相達、請書取束ね可指出事

庚午十二月

常務局

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

十二月廿六日

矢部与助

右の通被 仰渡候間、町年寄御請書左の通

雛形

\*振出し\*  
駅通司に於て、書狀郵便所御取建に付、虎御門外其余拾ヶ所へ書狀  
集め函御差出相成、右書狀切手売捌方、私共取扱可申、尤御規則の  
義は、猶御沙汰可有之旨被 仰渡候段、奉畏候、依之御請書差上申  
候、以上

未正月

何番組 町年寄 連印

右の通五区限り御取集、来正月八日無相違、詰所へ御差出し可被成  
候、以上

午十二月廿六日

当番 世話掛

\*振出し\*  
農工商の輩、猥に帯刀を致候義に付、別紙の通被 仰出候間、右躰  
心得違の者有之候は、急度申論、若不取用に於ては、速に可訴出

市・在 中年寄



事

庚午十二月

東京府

農工商の輩許可無之、猥に帶刀致し候者有之趣、以の外の事に候  
条、地方官に於て屹度取締可致事

庚午十二月

太政官

諸技藝師・家私塾相開候ものは、其地方官の許可を可受候事

庚午十二月

太政官

諸技藝師・家私塾相開候向、生徒入塾の節、身元取札、地方官添書  
無之もの、入塾差許候義、不相成候事

但塾生増減明細書記、月末地方官へ可届出事

庚午十二月

太政官

右三ヶ條の通り被 仰出候間、市・在不洩様可触知もの也

庚午十二月

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

十二月廿六日

岡崎松之助

開港場居住商人、外国人へ諸品売買の義に付、違約出来、訴出候者  
共多分は口上引合而已にて、約定の証拠無之、畢竟言語不通約定引  
合方不行届故、違約相成候義と相聞候間、自今必約定証書為取替候

明治三年十二月二十六日

様可致候

右の趣、市・在不洩様告諭可致候也

庚午十二月廿六日

東京府

今般相州釧崎へ燈明台建築、来未正月十一日より点火候条、此旨相  
達候事

庚午十二月

太政官

右の通被仰出候間、廻船問屋其外船持共へ可相達もの也

庚午十二月廿六日

東京府

\*張出し\*  
市中街上に於て乱酔放歌物に触れ、人を遮り往來の妨を為し、甚し  
きは抜刀を以て路人を恐嚇し、獸畜を斬殺し、或は酒樓等にて乱暴  
相働候者有之節は、速に取押へ、帶刀取上げ、最寄取締所へ可訴出  
事

庚午十二月

太政官

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触示候也

庚午十二月

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

十二月廿六日

矢部与助

\*張出し\*  
火付・盜賊・人殺、或は贗金札を作り候者見聞次第、早速其最寄役  
所へ召捕差出し、又は訴出可申候、吟味の上、相違無之候は、御

明治三年十二月二十六日、二十七日

褒美被下置候事

但召捕候節、手疵負候敷、又は即死等のものは、厚く御扶持被下候、訴人致し候もの引合の為、役所へ被 召出候節は、職業向迷惑不相成様、相応の御手当可被下候間、有體に可申立候、若隠し置後日他より於相頭には、可為曲事候事

庚午十二月

太政官

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触示者也

午十二月

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午十二月廿六日

矢部与助

人相書

陸前国遠田郡 浦田村百姓 甚九郎

一、年齢四拾三歳

一、中丈にて少々太り候方

一、面鉢円く、色赤黒<sup>いろ</sup>き方

一、眼・口・耳大きな方

一、齒並揃ひ、唇厚き方

一、鼻常鉢

一、眉毛薄き方

一、言語低く、鼻へかゝる

一、半髪にて色黒き方

一、髭薄き方

一、手足太き方

一、其節の着服、木綿紺綴々袴半天、間着同綴々の袴半天、下着同綴々の筒袖袴半天、黒木綿帯、木綿の紺股引、右のもの当午十月五日養母とめへ口論の上、疵為負逃去り候後、とめ義相果、逆罪のものに付、見懸次第捕押へ可訴出、若隠し置於頭には、可為曲事

右の趣、市・在不洩様可触知もの也

庚午十二月

右の通被 仰渡奉畏候、早々張出し候様可仕候、仍如件

庚午十二月廿六日

江塚五郎蔵

去巳年中、為替会社に於て、発行の銀三匁七分五厘の預り手形、当午十二月限り引替可致段、先般大蔵省より相達置候処、遠在散布の分引替へ残も有之哉に付、残手形引替の義は、来三月迄延期候条、東京元大坂町為替会社へ可差出候事

但右手形当年<sup>\*限り\*</sup>寄通用停止の事

庚午十二月

太政官

右の通被 仰出候間、市・在不洩様可触示もの也

庚午十二月

東京府

右の通被 仰渡奉畏候、仍如件

午十二月廿七日

村松為谿<sup>けい</sup>

去る廿四日、御布告有之候大工始諸職人賃銀取締の義、類焼場は勿論、惣鉢へ行届候様可取計旨、常務局にて御沙汰に付、早々店連判御取行届候は、其段御書取、正月八日迄に詰所へ無間違御差出可被成候、此段御達申候、以上

庚午十二月廿七日

当番世話掛

右御達申候、以上

十二月廿七日

御用伺 当番

来未正月三日神祇官へ

行幸被 仰出候に付、火の元の義、別て入念候様可致候

右の趣市・在不洩様可触知者也

庚午十二月

右の通被 仰渡奉畏候、為後日仍如件

庚午十二月廿八日

兼房平十郎

深野長兵衛

右相達候事

庚午十二月廿九日

廿四区扱所

右御達申候、早々御順達可被成候、以上

午十二月廿九日

町用掛

清吉殿	惣七殿	兵蔵殿	庄三郎殿
庄吉殿	忠兵衛殿	藤七殿	惣吉殿
庄次郎殿	甚右衛門殿	安兵衛殿	五郎兵衛殿

喜兵衛殿	嘉七殿	珍平殿	安右衛門殿
清次郎殿			
富田氏	神取氏	富山氏	

右前後御用捨可被下候、以上

午十二月廿九日

弥兵衛

明治三年十二月二十七日〜二十九日